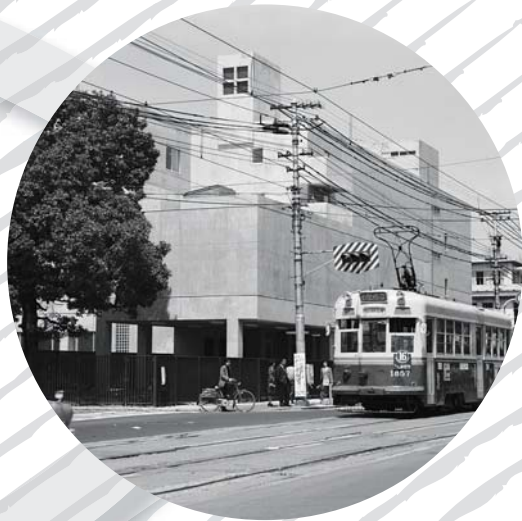


**京都大学人文科学研究所
創立80周年**



表紙写真（上から）

東方文化学院京都研究所（1930-）
独逸文化研究所（1934-1973）
人文科学研究所旧本館（1975-2007）
人文科学研究所新本館（2008-）



人文科学研究所分館ステンドグラス

目次

巻頭言 水野直樹 1

人文研80年史関連資料紹介

独逸文化研究所 2
人文科学研究所（旧） 3
昭和九年中国視察旅行 4
アフリカ調査 5
ヨーロッパ探険 6

人文研今昔

建物の変遷 7
人文研の所蔵品 12
公開講演会今昔 14
共同研究班今昔
東方部の共同研究一本読み会 金 文京 16
京都の学風 横山俊夫 17

人文研の思い出

助手のころ 阪上 孝 18
哲文研究室の日々 小南一郎 19
懐かしき自由 齋藤希史 20
梁啓超と縁 村上 衛 21

資料編

独逸文化研究所創立関連資料 22
人文科学研究所官制制定説明資料 23
人文科学研究所拡大案参考意見書 24
第一回北平旅行概況報告 26
アフリカ通信 31
多田道太郎氏の受難を報ずる新聞記事 36

巻頭言



京都大学人文科学研究所は、本年、創立80周年を迎えます。

研究所のひとつの起源は1929年に開設された東方文化学院京都研究所にあります。そこから数えると今年は80年になりますが、それと同時に、京都帝国大学の附置研究所として旧・人文科学研究所が設置されて70年、戦後、この2つの研究所と民間の西洋文化研究所が統合して京都大学人文科学研究所が開設されてから60年にも当たっています。

一方で、研究所は来年度から人文系の全国共同利用・共同研究拠点として新たな出発をすることになっています。

このような節目の年に、研究所のこれまでの歩みを振り返り、将来を展望することは、たいへん大事なことだと思います。

昨年、研究所本館は東一条西北角から京都大学本部構内に移転しました。移転に際して文書、資料などを整理したところ、私たちも知らなかったものがたくさん出てきました。その中には、戦前の研究所に関する文書や写真、研究所の先輩たちの素顔を知ることのできる興味深い記事などが含まれています。

30年前には『京都大学人文科学研究所50年』が発行されていますが、それに収録されなかった資料も多くあります。また、研究所にも残っていない資料を国立公文書館、外務省外交史料館所蔵文書から補うこともできました。

これらをまとめて、研究所80年の歩みを紹介する小冊子を編集・発行することとしました。すべての資料を盛り込むことはできませんでしたが、本小冊子を通じて研究所の歩みを広く知っていただければ幸いです。

なお、この冊子の内容は、共同研究班「人文研探検」（班長・岩城卓二，菊地暁）の成果によるところが大きいことを言い添えておきます。

2009年9月9日

京都大学人文科学研究所長 水野 直樹

独逸文化研究所

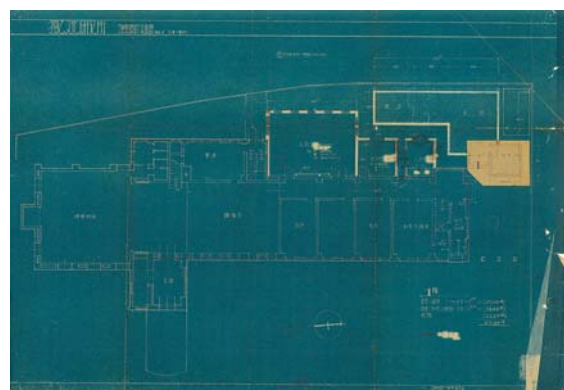
独逸文化研究所は、戦前期、ドイツ文化普及のためにドイツ語学習会・講演会・音楽会・レコード演奏会・映画会等を行った社団法人で、1945年に社団法人西洋文化研究所と改編・名称変更し、その後、建物は京都大学人文科学研究所が引き継ぐ。建物の設計者は村野藤吾で、日本の敗戦後、米軍によって接収され、接収解除後の1952年から73年に取り壊されるまで人文研分館として利用された。設立の中心となったのは駐日ドイツ大使フォレッチと元首相清浦奎吾で、建設・運営資金は実業家・著名人の寄付金によって賄われた。創立総会は1933年5月に開催。「社団法人独逸文化研究所定款」(資料編 資料1)は、この創立総会で提案されたもので、研究所の創立趣旨や理事会の構成などがわかる。



独逸文化研究所全景 日の丸とハーケンクロイツがはためく。



独逸文化研究所にて開催された^{ゆうべ}バッハの夕(1941年11月8日)



独逸文化研究所設計図

人文科学研究所 (旧)

人文科学研究所の設立

1939年1月、文部大臣荒木貞夫は6帝大総長との懇談会の席上、日本的学問の展開、東亜新秩序の建設等について協力を要請する。これをうけ京都大学は人文科学研究所の設置を要望し、8月にはこれを認める官制が制定された。官制制定に際しての説明資料(資料2)では、設立の目的として文系学部の研究を有機的に総合させ、国策遂行に資する研究を行うことがあげられている。

敗戦直後の人文科学研究所

日本の敗戦後、人文科学研究所は国策研究機関という性格の転換を迫られた。紹介する資料3は所内「機構拡大原案作成委員会」(安部建夫は人文科学研究所長)が提案した改革案。研究所の政治的立場を社会民主主義とし、日本部・中国部・アメリカ部・ソビエト部・西欧部・国際部の六部の他、調査部・資料室からなる壮大な提案で、敗戦直後の動向がうかがえる貴重なもの。残念ながら摩耗による劣化が激しく、判読不明箇所が多い。



附属図書館北側の人文科学研究所建物

委員会出席者名

羽田亨総長

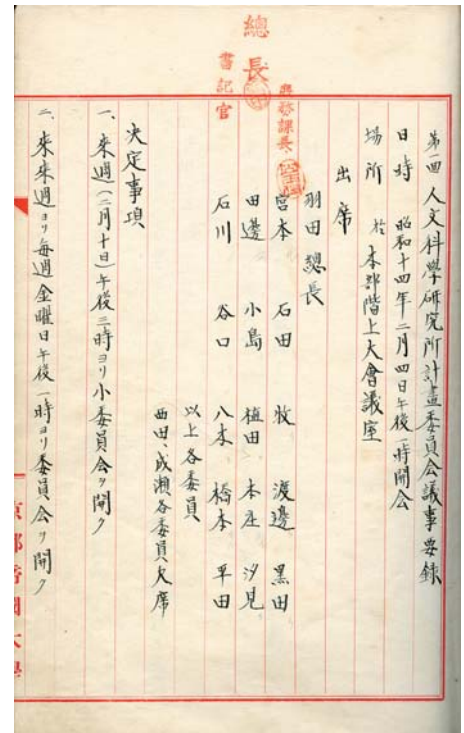
宮本英脩、石田文治郎、牧健二、渡邊宗太郎、黒田覚(法)

田辺元、小島祐馬、植田寿蔵(文)

本庄栄治郎、汐見三郎、石川興二、谷口吉彦、八木芳之介(経)

橋本伝左衛門、平田憲夫(農)

欠席：西田直二郎、成瀬清(文)



第一回人文科学研究所計画委員会議事要録(1939年)

昭和九年中国視察旅行

東方文化学院京都研究所（東方文化研究所）の所員による中国での実地調査としては、1936年の龍門調査、1938年から44年にかけての雲岡調査が有名であるが、これ以外にも1934年から39年まで、毎年所員数名が約2カ月間、見学、資料収集、中国人研究者との交流のために定期的に中国を訪れていた。資料4は、1934年8月24日から10月2日にかけて、塚本善隆（1898-1980）、能田忠亮（1901-1989）、小川（貝塚）茂樹（1904-1987）、長広敏雄（1905-1990）、森鹿三（1906-1980）の五氏が、華北を旅行したのちに作成した報告書である。五人がそれぞれの関心にもとづいて、現地の視察、資料の調査にあたった様子がうかがえる。北京（当時の北平）での一行の滞在先は、東方文化学院と同じく東方文化事業のひとつとして設立されていた北京人文科学研究所であった。同研究所の所屋は、王府井大街東廠胡同にあった黎元洪（中華民国元大総統）の旧邸を購入したもので、現在は中国社会科学院近代史研究所の建物があり、今も人文研の教員が頻繁に訪れる場所であり続けている。

なお、これら中国調査のうち、1934年、1936年、1938年の調査の様様を記録した16ミリフィルムが人文研に残されており（本頁の写真の2枚はそのフィルムの一部）、そのデジタルデータは、京都大学研究資源デジタルアーカイブにおいて公開予定である。



1930年代の北平（崇文門大街）



長広敏雄氏撮影16mmフィルム「昭和九年北支遊記」より西域雲居禪林（雲居寺）訪問時の様子



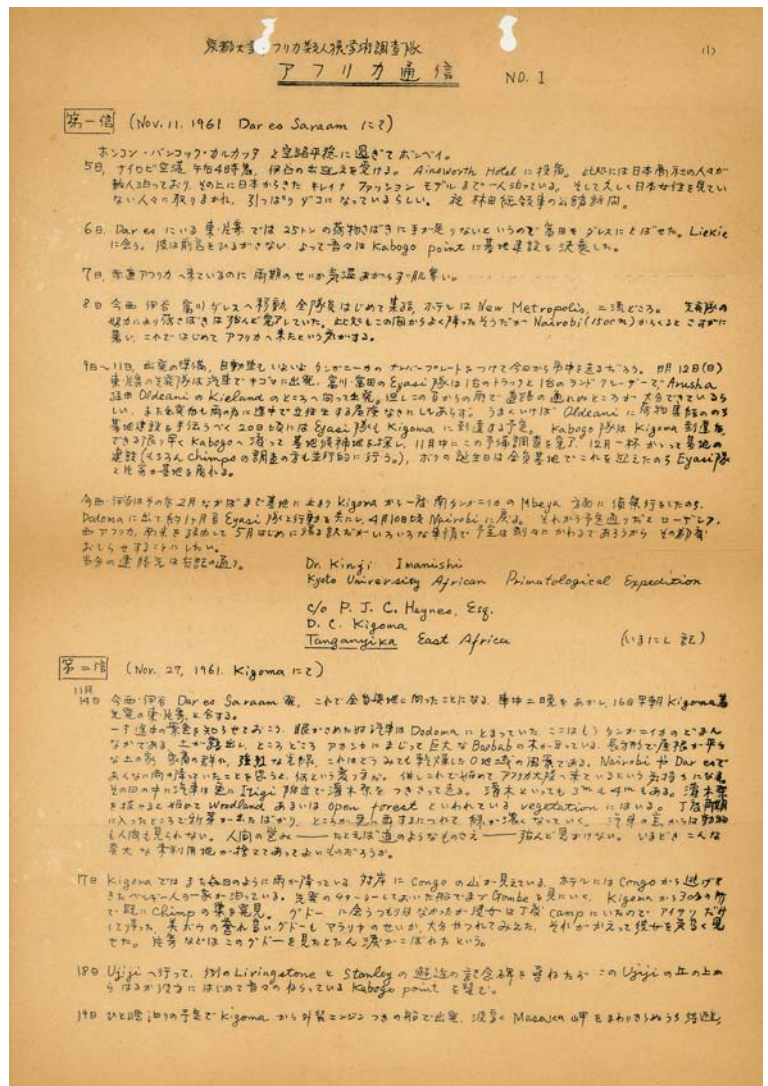
同じく北平西郊の香山飯店

アフリカ調査

1961年より文部省海外学術調査補助金をえて「京都大学アフリカ学術調査」が実施される。人類誕生の地・アフリカから人類進化の解明を目指す野心的な企図である。その中心となったのは、社会人類学講座の新設（1959年）により57歳にして「万年講師」から教授へと昇進した人類学者・今西錦司（1902-92）だった。日本初のアフリカ学術調査である日本モンキーセンター第一次ゴリラ調査隊（1958年）としてウガンダ、コンゴの予備調査を行っていた今西は、この京大調査隊でタンガニーカ湖畔に長期観察のためのカボゴ基地を設営、腰を据えた本格的フィールドワークに取り組むこととなる。資料5「アフリカ通信」はそうした今西たちの活動と印象を速報した好資料である。今西退官後（1965年）は理学部自然人類学教室の伊谷純一郎（1926-2001）を中心に事業が継続され、今西の後任となった梅棹忠夫（1920-）も引き続きこれに参加した。報告書は欧文紀要 Kyoto University African Studies (1966-76, 全10巻), 今西・梅棹編『アフリカ社会の研究—京都大学アフリカ学術調査報告—』（1968）があり、また、講談社現代新書に今西『人類の祖先を探る—京大アフリカ調査隊の記録—』（1965）がある。



今西錦司（1902-92）。アフリカにて。



今西錦司『アフリカ通信』。今西から寄せられた短信をガリ版で起こしたもの。『昭和三十六年（第一次）京都大学アフリカ人類学術調査隊関係』と題された簿冊に綴じられている。

ヨーロッパ探検

正式名称「京都大学ヨーロッパ学術調査隊」、通称「ヨーロッパ探検」は、1967年度（桑原武夫（1902-88）ほか7名）、1969年度（会田雄次（1916-97）ほか7名）、1972年度（会田ほか7名）の三次にわたって実施され、イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、イタリア、スイス、ユーゴスラヴィア、トルコなどの調査が行われた。この調査の実質的発案者であり推進者である梅棹忠夫（1920-）はその目的を「ヨーロッパ地域学の立場」として提起している。日本人がヨーロッパを調査することによって、ヨーロッパ人が非ヨーロッパ人を調査・記述するという非対称な関係性に異議申し立てを行い、ヨーロッパ文明を規範とみなす固定観念を相対化する、というのがそのねらいだという。今風にいえば、反オリエンタリズムの萌芽的試みといったところか。じつ、この調査の参加者から、着実なフィールドワークと資料調査に根差した新世代のヨーロッパ研究者が輩出されることとなる。報告書は会田・梅棹編『ヨーロッパの社会と文化』（1977）のほか、朝日新聞社から桑原編『素顔のヨーロッパ』（1969）が刊行されており、このなかで多田道太郎（1924-2007）は、資料6に報じられた自らの受難について、「平和な村だけに反響がすさまじく、それがまた村人の心理を知るのにいささか役立つこととなった」と述べている。



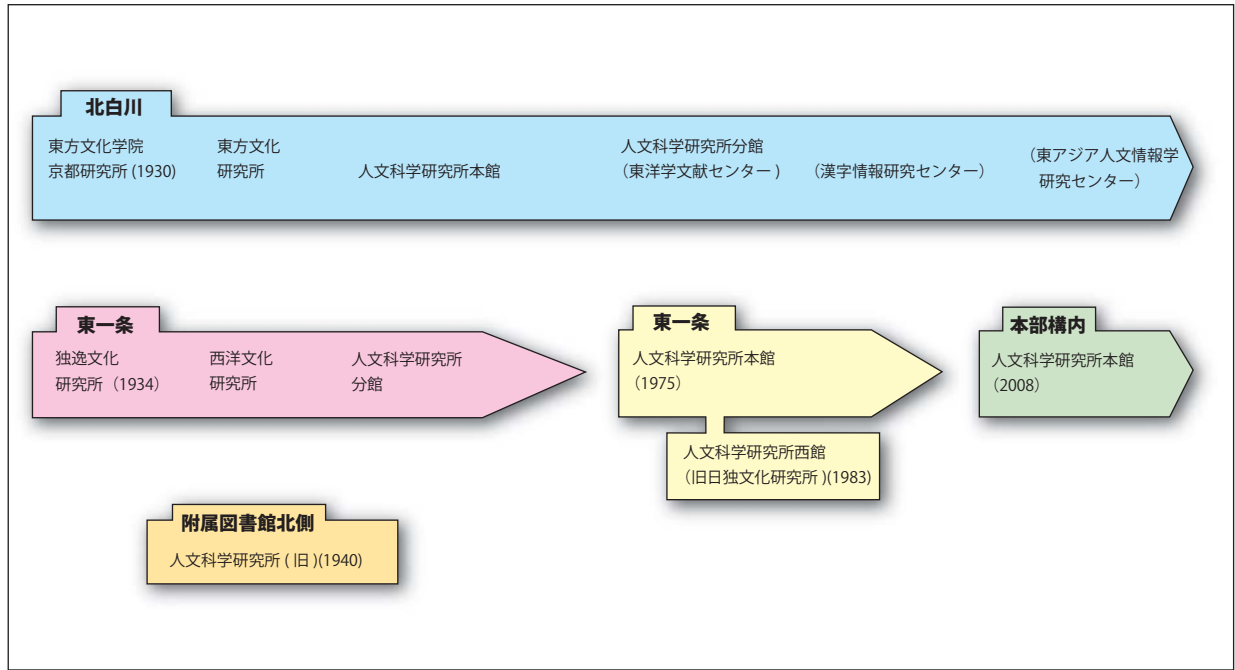
多田道太郎（1924-2007）



多田道太郎の“首しめ事件”を伝える新聞記事。現地から電送されたものがその訳文とともに『昭和42年2月起第1次京都大学ヨーロッパ学術関係書類』と題された簿冊に綴じられている。

人文研今昔

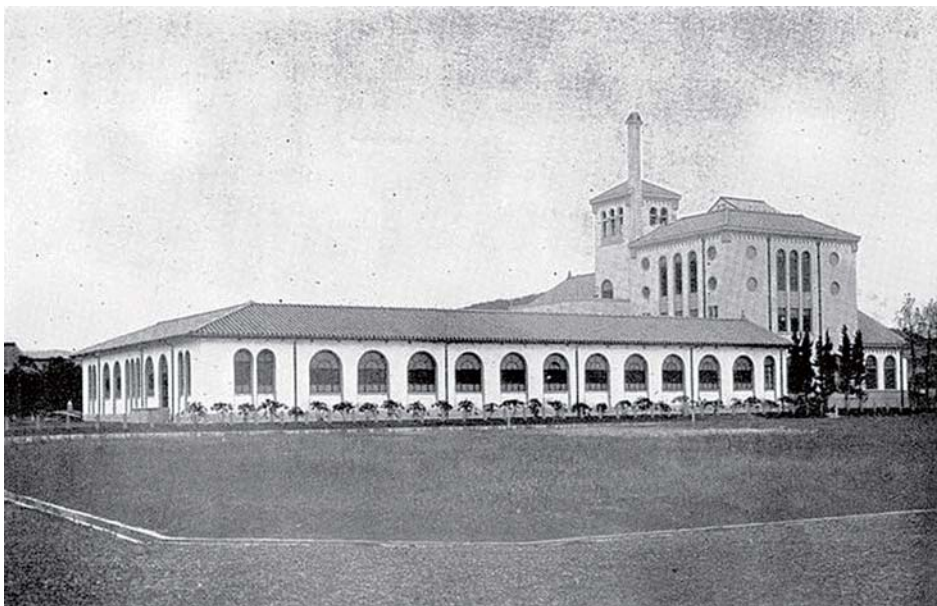
建物の変遷



京都大学構内での配置の変遷



人文科学研究所分館（東方文化学院：北白川）



落成直後の東方文化学院。奥田佳良二「東方文化学院京都研究所を見て」『新建築』7/4, 1931より。



東方文化学院中庭でのガーデンパーティー
(1936年)



狩野直喜博士胸像除幕式（1938年）



1997年大規模改修後の分館ロビー

旧分館（東一条）



旧分館（東一条）玄関前の集合写真。1960年代初頭の撮影と思われる。

上段左から：倉田淳之助 田中謙二 藤枝晃 松尾尊兌 林巴奈夫 中村哲 谷泰 三宅一郎 江口圭一
 中段：飯沼二郎（未詳） 樋口謹一 岩村忍 今西錦司 平岡武夫 藪内清 長広敏雄 島田度次
 井上清 渡部徹 多田道太郎 上山春平 牧田諦亮 藤原茂男
 下段：太田武男 会田雄次 清水盛光 鈴庄寅次郎 桑原武夫 坂田吉雄 貝塚茂樹 吉田光邦
 森鹿三



旧分館正門（撮影時期不明）



旧分館（独逸文化研究所）に設置されていた交友記念碑

旧本館（東一条）



落成直後の旧本館（1975年）
外壁は後に白く塗り替えられる。



落成記念展示会の様子（1975年）

展示室とされたこの旧本館一階東側の部屋は、後に所の刊行物を収蔵する書庫となり、本館移転後の改築で現在は iCeMS（物質—細胞統合システム拠点）の玄関となっている。



落成記念式典（1975年）
二階大会議室にて。



西館二階会議室での共同研究班の様子（1997年）

西館は日独文化研究所の川端通移転にともない譲り受けた建物で、会議室のほか、書庫、各専務員室等があった。

新本館（吉田本部構内）



本館

西側よりのぞむ。右端のレンガ造建築は工学部土木工学教室本館。



本館四階大会議室



本館二階図書閲覧室

草間弥生「南瓜」が壁にかけられている。

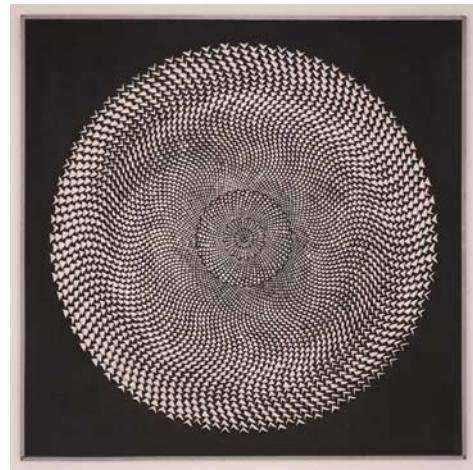
人文研の所蔵品



須田剋太作「縄文記号」（いずれも1965年）。東一条新所屋完成に際して飯沼二郎の依頼により本作1点（旧本館大会議室前廊下に展示）の寄贈がなされ、後に新所屋を訪れた須田が空いていた二階談話室の壁面にもう1点を寄贈する。経年劣化のため2002年に修復された後は旧本館大会議室に展示され、現在は新本館南入口に展示されている。高階絵里加2006『須田剋太の「縄文記号」をめぐる』（河野元昭先生退官記念論文集編集委員会『美術史家、大いに笑う』ブリュッケ）参照。



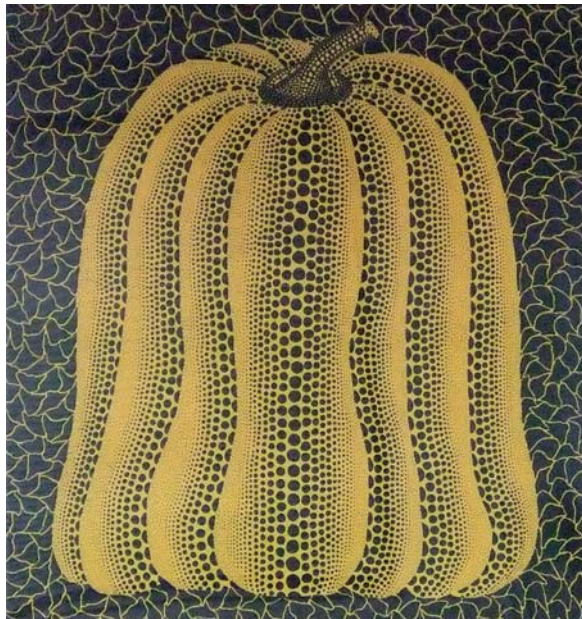
山田脩作「素材と形の間」（1974年制作 2008年11月、旧本館中庭より新本館中庭に移設済）



田主誠作「作品Ⅰ」（1968年 旧本館では玄関ホール、新本館では二階エレベーターホールに展示）。キャンバス地を切り絵の手法で加工している。「ギャラリー射手座」（三条大橋西詰）で開催された個展を鑑賞した吉田光邦の依頼により人文研に寄贈された。



扁額「以文會友」「雨鏡相照」。独逸文化研究所の設立に尽力した元首相・清浦奎吾（1850-1942）の揮毫を彫ったもの。「八十五老奎堂」とあり昭和10年（1935）の所屋完成時に書かれたものか。2ページ「バッハの夕」の奏者の背後に軸装された清浦の書を確認できる。扁額の制作年は未詳。東一条所屋の改築時の所長・林屋辰三郎がこの扁額に関する記述を残している（「扁額『以文會友』」，京都大学文学部編2005『以文會友』京都大学学術出版会所収）。



草間弥生作版画「南瓜」(1986年 新本館二階図書閲覧室に展示)。草間と親交のあった浅田彰を通じて人文研に寄贈された。



木鶏。作者、制作年、収蔵経緯いずれも未詳ながら、独逸文化研究所時代には既に存在したことが当時の写真から確認される。旧本館（東一条）では2階談話室の東北角の鬼門を守るように鎮座し、現在は新本館4階談話室に安置。



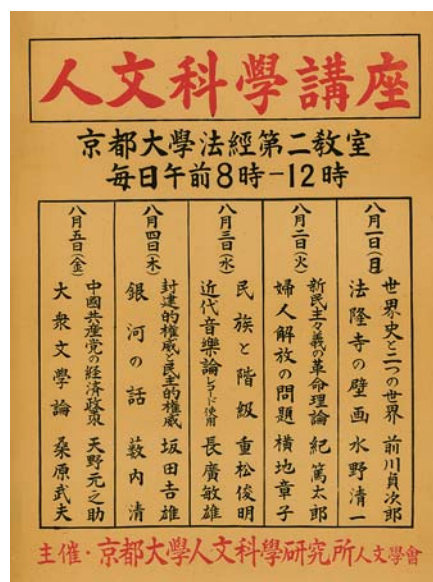
須田国太郎作「発掘」(1930年 北白川分館ロビーに展示)

公開講演会今昔

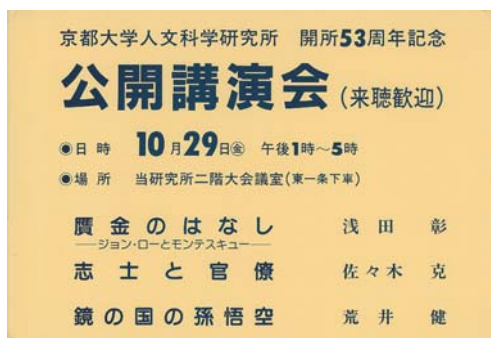
人文科学研究所は、研究成果の一端を広く公開すべく、前身である旧人文研、東方文化学院時代から所外の一般市民、学生に向けて講座・講演会を開催してきた。1949年に新人文科学研究所が設立された後は、「常設人文科学講座」と銘打って春夏秋冬の四期にそれぞれ講座を開催することとなった。その後、1954年に同講座が夏期講座に一本化された後は、これと毎年11月に開催される開所記念講演、さらに定年退職者による退官記念講演会が外部に向けての公開講座・講演会の柱となってきた。近年、外部に向けて知の成果を発信することがより強く大学・研究機関に求められるようになる中で、人文科学研究所も個別に開催されていた上記三講演会以外のシンポジウム、講演会、セミナー等を再編し、2005年に「人文研アカデミー」を発足させた。このプログラムのもと、外部との連携公開講座、共同研究班主宰によるシンポジウム等、2008年度にはあわせて9シリーズの講座・講演会が開催されている。
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/academy/> 参照。



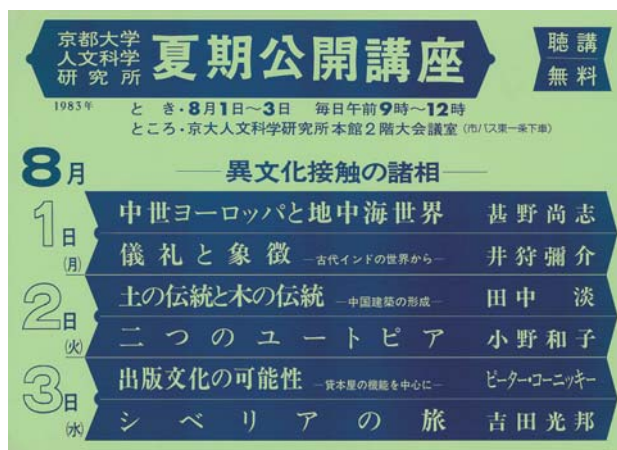
水野清一による雲岡石窟に関する講演（1938年）



第一回人文科学講座ポスター（1949年）



開所記念講演会ポスター（1982年）



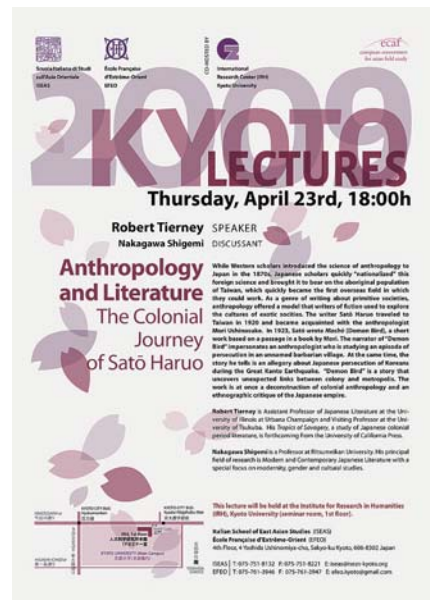
夏期公開講座ポスター（1983年）



人文研アカデミー夏期公開講座「古典再読」ポスター (2008年)



人文研アカデミー「アジアの仏教遺跡を掘る」の様子 (2008年)



人文学国際研究センター Kyoto Lecture ポスター (2009年)



人文研アカデミー・レクチャーコンサート「第一次世界大戦のあと」ポスター (2008年)



レクチャーコンサートの様子

共同研究班今昔

東方部の共同研究一本読み会

金 文京

東方部の共同研究は、一つのテキストを関連領域の研究者が一堂に会して精密に読む、いわゆる本読みが昔も今も主流である。このような試みは、学生の読書会などは別として、第一線の専門家を集め、研究所の正規の事業として行う例は、日本はむろん、世界でも珍しいであろう。人文研の共同研究の中でも、もっとも特徴的なのは、この本読み会である。

このような共同研究が正式に始まったのは、戦前の旧東方文化学院時代の一九三五年（昭和十年）のことで、この年、経学文学研究室による「尚書注疏の校定」と、天文暦算研究室の「三統術の研究」の二つの共同研究班が組織された。一九三九年に刊行された前者の研究成果『尚書正義定本』の序文で、故吉川幸次郎博士は、「至理は二無ければ、必ず参差を一の是に衷し、独見は違^{たが}うを恐れて、咸^みな同僚の討論を馳^はす。期^{さだ}めて筵を開き、此れ行き彼れ復し、経を執りて問難すること、相對して讎^{かたき}の若し」（原文は漢文）と、共同研究の意義を述べておられる。

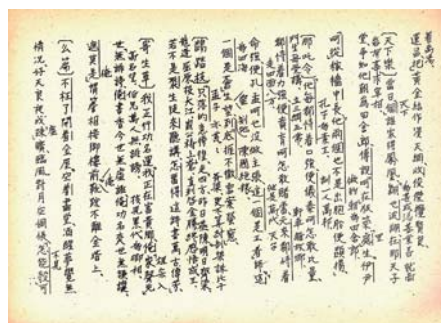
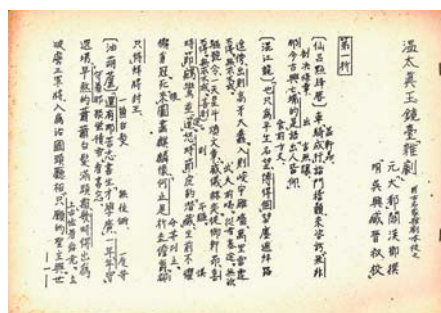
「至理は二なし」、つまり真理は一つとは、この場合、漢文はややもすると意味が曖昧なように思われがちだが、そんなことはない、意味するところは必ず一つということで、それを正確に知るためには、独りよがりの誤読を排し、討論により衆知を集める必要がある。古代中国では書物を校訂する時、異なるテキストを手にもった二人が、まるで讎同士のように向かい合って、厳密に行ったということで、校訂をまた校讎ともいう。それが「相對して讎の若し」である。

この「尚書注疏の校定」につづき、経学文学研究室では一九三九年より、元代の戯曲である元曲の語彙辞典編纂のための研究班が始まった。この研究班に参加された故田中謙二博士から私が直接うかがった話では、毎週まず会読の準備として、テキストの校訂などの資料を事前に準備する、当時のことであるからガリ版を切るのである。当日は担当者の準備した注釈をもとに全員で討論し、終わった後は必要な語彙をカードに取るという手順で、戦時中、広島、長崎に原爆が投下された後にも研究会は開かれたという。この時取った数万枚のカードは、今なお北白川分館に保管されており、私は学生時代、仲間とともにこのカードを写すことから勉強をはじめた。

私自身が最初に参加した研究班は、一九七八年から五年間行われた梅原郁先生主宰の「中国近世の都市と文化」班である。会読したのは南宋時代の杭州の都市繁盛記『夢梁録』で、後に同じく南宋の裁判文書『清明集』と交互に読むことになった。私が担当したのは一度だけだが、ほぼ二週間、毎日文学部の書庫で関連文献に当たり、訳注作りに二晩ほど徹夜したことを覚えている。にもかかわらず当日、誤読を一個所指摘された。この時の口惜しさは今も忘れられない。

現在の研究班も基本的には以前と同じ方式だが、大きく変わった点は、コンピュータによる検索の普及により、出典探しが容易になったことである。以前は出典探しのため、膨大な時間と労力を費やして書庫を徘徊せねばならず、それがまた勉強にもなったのだが、今では机の上で一瞬のうちに多くの事例を検索できる。しかし検索した多くの事例から適当な用例を選び、的確な解釈をあたえるのは依然として人間であり、共同研究の意義は今も変わらない。「相對して讎の若き」研究会の後、時に酒を酌み交わしながら、みなで和気藹々と談論する点も昔と同じである。

（文化構成研究部門教授）



元曲研究班の資料

京都の学風

横山 俊夫

飽きるということ — それは創造の母である。ひと言で人文研の共同研究と言っても、時代、課題、班員により千差万別。ただ、共通の特徴があるとすれば、期間が長く、集まる頻度も高いことである。数年間、毎週か隔週に班員が揃い続ける。この御時世によくまあ飽きもせず、とも言われる。じつは飽きも予定に織り込み済みの人文研方式の共同研究こそ、近ごろはやりの共同研究とは異なるところである。後者は、各人がすでに手にした成果を持ち寄り、短期間に予測通りの結果を出す方式である。

両方式の差は、共同過程で生まれる新知識への態度の違いにあらわれる。二十年前、イェールのさる研究者が、私の研究班にしばらく加わったあと、送別の宴でこう言った。「君たちは共産主義者だ。新発見の知識を、自分の手柄として公表する前に、惜しげもなく仲間にしゃべりまくって共有のものにしてしまうなんて。」自己主張で他に抜きでることを旨とする若々しい社会から見て、わが同僚の独占欲のなさは信じがたかったか。この「共産主義」がもたらすのは、共有によって珍しさは早々に霧散し、飽きが来ることである。そして、飽きて退屈する試練のなかから、さらに深い思考と知識が湧き出すのである。

1980年代後半、私が組織した班は、儒者貝原益軒が生きた安定期の社会をとりあげた。その理由は、変化ばかりに目を向ける歴史研究に飽きたことにあった。20世紀最後の四半期の好況がまだ続いていた当時、安定といえは停滞とほぼ同義であったことから、ウィーンの数学者が珍しがった。しかし、かの班にも飽きは訪れ、安定社会は人間だけを見ているとわからない

との考えが浮上。ならばと、生態学者や分子生命学者に助けを求めて楽しんだものの、学者ばかりでは退屈だとの声があがり、洛中洛外で伝来の家業を継ぐ人びとも招いた。話が噛み合うには、風呂や飲食をはさんでの議論続行が不可欠となる。京北町周山の府立ゼミナールハウス、関西学研都市のけいはんなプラザからは、それぞれ十年間、格別の時空を提供していただいた。

やがて、安定社会が閉塞をまぬかれ、^{フヤ}文を織りなして輝く文明にいたるかどうかは、さまざまな媒介の働きによるとの考えが芽生え、今世紀に入って、とくに言語の力についての議論を始めた。そろそろ飽きがかかるか — と思いきや、地球環境安定のための大学院構想が学内に浮上。工、農、経済といった実学が寄り合うと聞いて、それなら私もと、万里小路の橘会館内に、学内外を媒介しつつ新大学院を支援する「三才学林」を開くに至った。先端の知識や技術が、天地人三才のなかで如何ほどの意味をもつのかは、専門家だけではわからない。その問いを、無限対話のなかで、また専門外に通じる文体の英文誌の共同編集を通じて、つまり創造的な飽きを広めつつ、探っている。人文研の私の班も、今やこの学林の一隅に根を下ろしている。

ところで、冒頭の言は「必要は発明の母」をもじったもの。主語を *boredom* と英訳して、スタンフォードの歴史家に京都の学風はこれかなと思うと話したところ、彼はしばし黙してから、ぼつりと言った。「もしその格言が正しいなら、自分の学生たちはかなりクリエイティブに違いない。」

(文化研究創成部門教授・大学院地球環境学堂両任)



三才学林にて・2009年夏

人文研の思い出

助手のころ

1966年4月1日、人文科学研究所の西洋部助手に採用された私は、東一条の研究所分館に初出勤した。分館の所屋は、1934年に独逸文化研究所として建てられたものだった。

外務省外交史料館に所蔵されている史料(本誌に抄録されている)によると、社団法人独逸文化研究所設立の推進者は成瀬清京大教授で、設立総会は昭和8年5月21日に都ホテルで開かれた。法人の基金は10万円で、社屋の建設費として4万5千円が計上されている。その所屋は、写真に見られるように、村野藤吾の設計になる、緩やかな勾配の屋根をもつ木造モルタルづくりの瀟洒な二階建ての建物だった。エントランス・ホール天井には、ドイツのシンボルである大きな木彫りの鷲が飾られていた。

加藤秀俊さんが『人文』の70周年記念号に書かれているように、建物の二階の造りは複雑で、大部屋あり小部屋あり、廊下がコの字型に折れ曲がり、思わぬ所に地下まで降りる狭い階段があったりした。二階の北から二つ目の部屋が飛鳥井さんと私の研究室だったが、訪ねてきた友人が二階に上がったものの、入り組んだ廊下に撃退され、受付まで迎えに行ったこともあった。「お前、ややこしいところに居るなあ」というのが彼の感想だった。

私が助手になったころの分館には、藤岡喜愛さんや加藤さんのような大助手がおられたが、私を仰天させたのは牧康夫さんである。入所後間もないころ、牧さんが研究室を訪ねてきて、私の裸の写真を撮らせてもらえないか、とおっしゃる。啞然としている私に、牧さんは、自分の専門は体格からパーソナリティーを測定するシェルドンの素質心理学で、『フランス革命の研究』ではシェルドンの方法でダントンとロベスピエールの気質の違いを論じた論文を書いていること、そしてシェルドンの気質分析のデータとして私の写真を撮りたいと、説明された。その後『フランス革命の研究』の論文を読むと、桑原先生をはじめ、この共同研究の参加者7人の写真を撮ったと記されている。牧さんの意図はよく分かり、撮影を承諾したが、結局、撮影はうやむやになってしまった。

人文は共同研究で知られるが、週一回の研究会への出席とその事務が助手の主な仕事だった。具体的には、

阪上 孝 (名誉教授)

毎回の報告レジュメのコピー作りと研究成果の公刊のための原稿の統一と索引の作成である。私が助手になったときは、世界資本主義の共同研究の最終段階で、集まった原稿の整理と索引の作成が私の仕事だった。はじめて出版にかかわる仕事を受け持って、私は嬉々として仕事に精出した。

同じ年に第二次ルソー研究の研究班が始まった。研究会は金曜の一時半からで、短くてもはじめての半時間ほどは桑原先生のおしゃべりだった。はじめて聞くエピソードや裏話は面白かったが、なかなか始まらない報告にやきもきもした。研究報告に先だってルソーの「ジュネーヴ草稿」の会読が行われたが、助手になってからフランス語の勉強を始めたばかりの私にはとても歯が立たず、呆然としながらさまざま解釈と議論の行き交うのを聞いているだけだった。研究会終了後には二次会があり、私はこの酒席を楽しみにしていた。

研究会報告のコピー作りは結構大変だった。当時の複写機は湿式の複写機だった。報告者のレジュメを原紙に書き写し、それを複写機にかけるのだが、複写速度が遅く、時間がかかった。二階の踊り場に据えられた複写機が、少し湿ったコピーをのろのろと吐き出すのを待っていたものだった。

しかしほかに取り立てて仕事はなく、あれほどふんだんに閑な時間を持ち、その中で大事なことを学んだことは、その後ない。目先の成果ばかりに目が行き、慌ただしさのつる今日だが、人文学の研究には自由な時間、実るかどうが見通しのつかない探求の時間の確保が欠かせないと思う。

1973年、分館の取り壊しが始まり、同じ年に私は人文を離れた。私の助手時代は分館の取り壊しとともに終わった。



旧分館(東一条)の建物

哲文研究室の日々

一九七二年の四月に研究所の助手に採用され、哲文研究室の東南の隅に机を与えられた。仕事は、仏教議論集「広弘明集」を読む研究会のお世話をすることであった。仏教が六朝隋唐社会の中で対面している諸問題について、典故を駆使し、錯綜した文体で論じた文章は、なかなか手ごわいものであった。それでも雑事は少なく、様々な書物を読む時間が十分にあった。毎朝、机の前に坐ると、まず、魏晋南北朝時代の書物の景印本の上に、一卷ずつ、朱点を打つことを習慣にしていた。

そうしたある朝、突然、吉川幸次郎先生が哲文研究室に入って来られ、おまえはなにを読んでいるかと尋ねられたことがあった。すでに退休しておられた吉川先生は、前の晩、読書の中で面白いことを発見されると、それを誰かに話したくてならず、お宅に近い研究所にいるわたしのところに、その新見を話しに来られるのがしばしばであった。

吉川先生が、「通鑑」唐紀の某某年の条を見てみると云われ、そこを開けると、性急に、面白いだろうと云われる。しかし、急に読んでも、人間関係がよく分からず、面白さを理解しかねていると、先生は、なんだ共感をしてくれぬのかと不満げな顔をされた。またあるときには、宋代の詩餘の一句を示されて、情の字が女性性器を意味することがあるという議論を展開された。しかしわたしが、朝からなんですかといった顔をしたのであろう、掃興（興醒め）^{サオシン}といった風にして、哲文研究室を出て行かれた。このときに示された詩餘作品がなにであったのか、今もって探し当てることができずにいる。

そのころ吉川先生は、『杜甫詩注』の仕事に全力を注ぎ、研究所の図書室にも、足しげく来ておられた。これは別の人から聞いたのであるが、書庫の中の綫装本の帙の上に細かい塵が見えると注意をされ、むかしは、帙の上をいつもブラシで払っていたので、塵が乗ることなどなかったと云われたとのことである。書庫の棚に洋服のブラシが乗っているのを不思議に思っていたが、そうした用途のものであることを、はじめて知った。東方文化研究所時代、北京において、中国書の購入に関わられた吉川先生には、東方部の所蔵する古籍に対して、特別の思い入れがあったに違いない。

小南 一郎 (名誉教授)

杜甫の四川での詩作と関連して、先生は、四川の地方誌や宋代以降の文人たちの四川旅行記を網羅的に読んでおられ、そうした資料を書庫から借りだして哲文研究室に持



小南一郎助手と前川和也助手
(1975年当時)

って来られるのであった。「小方壺齋輿地叢鈔」などという叢書は、吉川先生がしばしば持って来られることから、その名を覚えた。借り出された書物の、ここからここまで、コピーを取ってこないかと云われる。当時はまだゼロックスが入っておらず、ロールになった印画紙に書影を焼きつけるのであった。できたばかりのコピーは少し湿っていたと覚えている。

できあがったコピーをお渡しすると、代金はいくらだと尋ねられる。毎月、それぞれの所員に割り当てられたコピーの枚数の中で処理しますから、お金は結構ですと答えると、「国家公務員が、一市民のために、そうした便宜を図ってよいものだろうか」と、まじめな顔で云われる。しかし、まったくの一市民であれば、「すまないけれど、この部分、コピーを取ってこないか」などとは云わないに違いない。

最初に述べたように、毎朝、哲文研究室で、一卷ずつ、古い書物に朱点を入れることを日課にしていた。訪ねて来られた吉川先生がそれを見て、必ず一卷を読むことを大切にするように。中途に興味深い語彙があった場合にも、それをカードに取ったりすると、挫折することになるから、と云われた。こうした具体的な助言を聞いて、吉川先生もまた、毎日一卷ずつ書物を読むことをみずからに課しておられたが、それが挫折したという経験がお持ちなのだと思像をした。

雑事が多くなって、一卷ずつ書物を読むという日課は、いつの間にか挫折をした。しかし、研究所で助手になったばかりのころの清新な気持ちは、今もなお、読書の際に、どこかに遺っているように思う。

懐かしき自由

私がかつての日本部の助手として人文研に在籍していたのは、1991年4月から1997年3月までの6年間。もう少し助手でいたかったのだが、ずいぶん我がままを許していただいたことを考えると、そのくらいが潮時だったのかもしれない。

助手になって2年目の夏、さっそく我がままを言って、北京大学に1年間留学した。中国古典文学を専攻していた私が日本部の助手となったのは、院生の時に飛鳥井雅道先生の共同研究「文学から何がみえてくるか」に参加したことがきっかけで、助手採用後は研究班の庶務を引き継いでいたから、一年の留守をすることに多少の躊躇はあった。飛鳥井先生の体調もよくはない。でも先生は、助手が留学するのは当たり前だと実に快く送り出してくれた。庶務は同じ日本部助手の落合弘樹さんが嫌な顔ひとつせず引き受けてくれた。写真は、その贅沢さを自覚していない能天気な私（北京大学構内）。この原稿を依頼されてから、「人文研にかかわる」写真をずいぶん探したのだが、記録に留めると意識すらなく、その自由さを満喫していたのだろう、ほとんど撮っていないことに愕然として、数少ない当時の写真から選んだ次第。

帰国後は、所内のいろいろな研究班に参加することが増えた。所属は日本部だが、西洋部や東方部の共同研究にも加わる機会を与えられた。大して勉強もして

齋藤 希史（東京大学）

いないのに、いい加減な発言や発表を繰り返していたものだとなれば冷汗三斗、しかし、それはそれでよかったのだと思う。飛鳥井先生は人文研の助手たるもの日東西の全部の研究班に出るくらいじゃなければいかんという態度だったし、そうやって出かけていっては無知をさと恥をかくことが将来の糧になると知っておられた。文学班を継続する班を助手として組織することを勧めてくれたのも、飛鳥井先生だった。文学班の仕事としてオランダ語版『ロビンソンクルーソー』の幕末訳『漂荒紀事』の注釈が仕上げられたのも、その自由闊達の風があればこそだった。

とにかく贅沢な6年だった。北白川分館の書庫に出入りできることはこの上ない喜びだったし、東一条西館の狭い書庫で思いもよらぬ本に出会うのも楽しかった。本館2階の談話室は、助手仲間であれこれ雑談する居心地のいい空間だった。

先日、久しぶりに京大を訪れたおり、東一条の旧人文研本館がずいぶん綺麗に化粧直しされているのに気づいた。移転のあと別の研究センターが使うことになった話は聞いていたけれども、実際に目にすれば、やはりちょっとした感慨はわくものだ。東京へと帰る新幹線の中で、あの年月の得難さを思い返しながらか、現在にどれほど生かし得ているだろうか、しばし自問に沈んだのである。



北京大学構内にて（1992年）

梁啓超と縁

写真は丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』の訳注作製の会合の一齣である。2001年秋に人文研東方面の助手として京都に来るまで、この梁啓超と私はそれほど縁があったわけではない。もちろん、東洋史畑の片隅にいた以上、身近な研究者で梁啓超ファンは少なくなかった。しかし、何しろ私の研究が福建省南部（閩南）の社会経済史であり、具体的には商人や漁民、あるいは密輸業者や海賊を対象としていたため、知識人とはそれぞれ縁がないと思っていたからである。そのうえ梁啓超は「我が」閩南人と敵対する広東人の一員であった。

ところが、京都ではいきなり梁啓超との縁ができてしまった。森時彦先生に『梁啓超年譜長編』なるものの会合に出席するように言われたのがその始まりである。『年譜長編』の最初の会合は着任して1週間ほどの11月9日であったようだ。一つの文献を何人もの研究者が集まって訳文や註を検討するのは、日本の東洋史研究では伝統的なスタイルであるが、近代史のテキストを対象とした会合に参加するのは初めての経験であり、刺激的であった。狭間直樹、森時彦、井波陵一、江田憲治、石川禎浩、岡本隆司、高嶋航の諸先生方の末席に加わりつつ、東京とは違う学問文化に自然に慣

村上 衛（横浜国立大学）

れていった感じがする。それというのも、出版が決まってからは、少なくとも2週間に1回は会合があり、70回以上、少なくとも3～4時間は座っていたのだから、お茶を入れるぐらいしか仕事をしていないとしても、感化されるのは当然であっただろう。中国社会科学院近代史研究所の楊天石先生と中山大学の桑兵先生の学識を肌で感じることは得難い経験であった。つくづく残念であるのは、島田虔次先生の警咳に接することができなかったことである。

テキストである梁啓超の書簡そのものも、興味深いものであった。書簡は政治、経済、外交、文化の様々な側面を照らし、知識人とは無縁と思っていた自分の無知にはすぐに気づかされた。そもそも、梁啓超こそが、中国においては近代的な経済史研究の祖と位置づけられているのだから。

最初の会合からわずか3年後、2004年11月、岩波書店から『年譜長編』最後の第5巻が刊行された。正直、最初は長い会合と思っていた年譜長編の会も、最後の方はあっという間に終わってしまい、今では懐かしい思い出である。最後に私事になるが、梁啓超との縁は、『年譜長編』全5巻著者割引のセールスを通じて、私の伴侶との縁ともなっている。



北白川分館歴史研究室での研究会（2004年）

資料編

*以下の資料翻刻については、京都大学大学院文学研究科歴史文化学専攻 山田淳平氏の協力を得た。記して謝意を表する。

資料1 独逸文化研究所創立関連資料 (1933年)

社団法人独逸文化研究所定款

第一章 目的

第一条 本社团ハ営利ヲ目的トセサル

社団法人トシ京都市ニ研究所ヲ設ケテ日独文化ニ関スル智識ノ増進並ニ日本国内ニ於ケル独逸文化ニ関スル智識ノ普及ヲ図ルカ為ニ講演講義其ノ他ノ学術的事業ヲ行フコトヲ以テ目的トス

第二章 名称及事務所

第二条 本社团ハ社団法人独逸文化研究所ト称ス

第三条 本社团ノ事務所ヲ京都市 町 番地ニ置ク

第三章 資産

第四条 本社团ノ資産ヲ金拾万円トシ本社团設立ノ為ニ為サルル寄附財産ヲ以テ之ニ充ツ

前項ノ資産ハ其ノ一部ヲ以テ会館ノ建築費ニ充テ残額ハ適当ノ方法ニ於テ之ヲ保管スヘキモノトス
不動産ノ譲渡其ノ他ノ処分並ニ賃貸借ハ社員総会ノ決議ニ依ルニ非サレハ之ヲ為スヲ得サルモノトス

第五条 社团ノ経費ハ資産タル財産ヨリ生スル利子其ノ他ノ収益研究会ノ事業ヨリ生スル収入寄附金ヲ以テ支弁ス

社团カ解散スルトキハ社团ノ財産ハ第一条ノ意味ニ於ケル学術的事業ノ為ニ使用スヘキモノトシ其ノ実施細則ハ社員総会之ヲ定ム

第六条 会計年度ハ毎年四月一日ヲ以テ始マリ翌年三月三十一日ヲ以テ終ル

第四章 理事及監事

第七条 理事会ハ九名ノ理事ヲ以テ

- 一、京都帝国大学総長ノ現職ニ在ル者
- 二、日本国駐在独逸大使ノ現職ニ在ル者
- 三、所管領事ノ現職ニ在ル者
- 四、京都帝国大学長カ日本帝国文部大臣トノ協議ヲ以テ日本人タル当該専門学者中ヨリ選定シタルモノニ二名
- 五、社員総会ニ於テ社員中ヨリ選出セラレタル者四名

第八条 前条第四号及第五号ノ規定ニ依リ理事タル者ノ任期ハ之ヲ四年トス、但理事会又ハ社員総会ニ於テ多数ノ決議ヲ以テ何時ニテモ之ヲ解任スルコトヲ得

前項ノ理事中欠員ヲ生シタル場合ニ於テ補欠トシテ理事トナリタル者ノ任期ハ前任者ノ残期間トス

第九条 理事会ハ理事ノ互選ニ依リ理事長一名及常務理事一名ヲ定ム

理事会ハ社团ノ事務ヲ統轄シ研究所ノ事業計画並ニ予算ヲ決定ス

理事会ハ三名以上ノ理事出席シタル会議ニ於テ出席

シタル理事ノ多数決ヲ以テ一切ノ決議ヲ為スヘキモノトシ可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス

理事長ヲ欠クトキカ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ一時其ノ任務ヲ行フコト能ハサルトキハ常務理事ニ代リ常務理事ニ付キ同一ノ事由アルトキハ年長ノ理事其ノ年齢ノ順位ニ従ヒ之ニ代ルヘキモノトス

第十条 理事長ハ理事会ノ決議ヲ執行シ社团ノ一切ノ事務ヲ管掌ス

常務理事ハ理事長ノ指揮ヲ受ケテ日常ノ事務ヲ執行ス

第十一条 第三者トノ間ノ行為ニ付キテハ理事長ハ常務理事ト共同シテ社团ヲ代表スヘキモノトス

第十二条 本社团ニハ監事二名ヲ置ク

監事ハ社員総会ニ於テ社員中ヨリ之ヲ選挙ス

監事ノ任期ハ四年トシ第八条ノ例ニ依ル

第五章 社員総会

第十三条 社員総会ハ理事長之ヲ招集ス

各理事ハ理事長ニ対シ会議ノ目的タル事項ヲ示シテ総会ノ招集ヲ求ムルコトヲ得

此ノ場合ニ於テ理事長カー週間内ニ招集ノ手続ヲ執ラサルトキハ其ノ理事ハ自己ノ名ヲ以テ之ヲ招集スルコトヲ得

総会ノ招集ハ会日ヨリ二週間前ニ会議ノ目的タル事項ヲ記載シタル書面ヲ発スルコトニ依リテ之ヲ為ス

第十四条 理事長ハ毎年一回一定ノ時期ニ於テ通常総会ヲ招集シテ事業ノ状況ヲ報告シ決算ノ承認ヲ求ムルコトヲ要ス

監事ハ前項ノ報告及決算ニ付キ総会ニ対シ書面ヲ以テ其ノ意見ヲ報告スヘシ

第十五条 総会ニ於テハ理事長議長トナリ理事長故障アルトキハ常務理事ニ代リ

総会ノ決議ハ出席シタル社員ノ多数決ニ依ルモノトシ可否同数ナルトキハ議長之ヲ決ス

社員ハ社員タルモノヲ限り代理人トシテ総会ニ出席セシムルコトヲ得

第十六条 本定款ニ定メアル事項ノ外定款ノ変更及解散ハ社員総会ノ決議ニ依ルコトヲ要ス

第六章 社員

第十七条 本社团ニ財産ヲ寄附シタル者ニシテ書面ニ依リ入社ノ申出ヲ為シタル者アルトキハ本社团ハ理事会ノ決議ニ依リ之ヲ社員トナスコトヲ得

第七条第一号乃至第四号ニ依リ理事タル者ハ理事在任中ハ当然社員タル資格ヲ有ス

第十八条 理事会ハ名誉社員ヲ選定推薦スルコトヲ得 名誉社員ハ理事会ノ決議ニ依リ名誉総裁一名ヲ推戴ス

第二十条 社員ノ死亡書面ニ依ル脱退ノ申出及除名ニ依リ退社ス
除名ハ理事会ノ決議ニ依リテ之ヲ為ス但除名セラレタル社員ハ除名決議ニ対シ社員総会ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第七章 研究所

第二十一条 研究所ハ日独文化ノ相互的理解ヲ深化シ殊ニ日独文化ニ関スル學術の事業ヲ催進スルコトニ依リテ社団ノ目的ノ実現ヲ図ルヲ以テ其ノ任務トス
研究所ノ事務規定ハ理事会之ヲ定ム
研究所ハ主事之ヲ管掌シ理事会ノ毎年定ムル事業計画及ヒ予算ノ範囲内ニ於テ主事ノ管理ニ任セタル財産ニ付キテハ有効ニ之ヲ処分スルノ代理権ヲ有スルモノトス

附則

本社団設立ノ時ノ理事ハ九名トシ設立者ノ多数ノ決議ヲ以テ之ヲ選定ス
前項ノ理事ノ任期ハ設立後ノ第一次ノ通常総会ノ終結ヲ以テ満了ス

社団法人独逸文化研究所予算
基金 拾万円
一、建築費
建築費 四万五千元

什器費 貳千五百円
税金其ノ他雜費 貳千五百円
合計 五万円
雜額（維持費） 五万円
年利子（六分トスレハ） 參千円

二、經常費

建物保存費 貳百円
暖房費 參百円
水道費 百貳拾円
保險掛金 貳百円
筆墨郵税 貳百六拾円
印刷物 參百円
書籍購入費 參百円
小使（年末手当ヲ含ム） 五百貳拾円
小計 貳千五百円

其ノ他ノ支出

助手一人（住宅以外ノ手当） 貳百四拾円
雜費（主トシテ什器ノ補充） 貳百六拾円
合計 參千円

外務省外交史料館「本邦ニ於ケル協会及文化団体関係雜件ノ日独文化協会関係」(JACAR Ref.B04012434600) より抜粋。
なお第十九条は原史料脱。

資料2 人文科学研究所官制制定説明資料（1939年）

人文科学研究所ニ関スル件

京都帝国大学ニ人文科学研究所ヲ附置セントスル趣旨ハ時局ニ鑑ミ国家ニ須要ナル人文科学ノ綜合研究ヲ行ヒ東亜新秩序ノ建設ト日本文化ノ創造發展トニ寄与セントスルニアリ

即チ之ニ依リテ文科の諸学部関係ノ研究ヲ有機的ニ綜合シテ其ノ実効ヲ挙ゲ以テ日本並ニ東亜ニ関スル諸学ヲ確立シ国家ガ時局下ニ於テ所期スル大学ノ職分ヲ十分ニ尽サシメントスル趣旨ニシテ右ハ荒木文部大臣ノ帝国大学ニ対スル要望ニ基キ京都帝国大学ニ於テ慎重

審議ノ結果申請シ来リタル事項ナルモカカル研究施設ノ創設拡充ハ他ノ大学ニ付キテモ同ジク緊要ナルモノナルヲ以テ文部省ハ将来ソレ等ノ事項ノ実現ニ鋭意努力セントスルモノナリ

公文類聚・第六十三編・昭和十四年・第十四卷・官職十一・官制十一 件名「人文科学研究所官制ヲ定メ○帝国大学高等官官等俸給令中ヲ改正ス」より抜粋。

資料3 人文科学研究所拡大案参考意見書 (1947年)

(表紙)「昭和二十二年二月 二十一日 於本部小会議室
人文科学研究所拡大に関する参考意見書
機構拡大原案作製委員会 (安部建夫記)」

人文科学研究所拡大に関する参考意見書

- 一、人文科学研究所は、総務部と研究部とから成る。研究部をもつてその根本的使命を達成すべき主要機関とし、総務部所属の調査室と資料室とを、これが最も直接的な補助機関とする。総務部には、以上の外、事務室・図書室及び編輯室を置く。

研究対象。研究所使命。

箇条書(三ヶ)二分ケテハイカマ

- 一、研究部は、日本及びこれと親近不可分の関係に在る世界の主要なる諸国家に於ける、若しくはそれらを連ね、それらを超えて存在する現代文化、特にその(イ)政治組織 (ロ)社会構造 (ハ)生活水準 (ニ)生産諸関係 (ヘ)民族心理 (ト)俗習慣(輿論)を含む (ホ)各種觀念形態 (特に思想・道徳・宗教・芸文) 並びに(ヘ)世界秩序 (世界国家制・国際機構等) 諸問題を、主として政治学・法学・経済学・財政学・社会学・心理学・地理学・文学・哲学・倫理学 教育学 等総じて人文科学的な諸見地から総合的に検討し、特定の問題ごとに、先ず (イ)歴史的にその由つて来つた所以を明らかにし、(ロ)一般理論に照してこれが真義を把握し、(ハ)進んではその実践的乃至は政策学的意義を究明することを目的とする。ただし、具体的には必しも各部各班に共通な一ヶ若しくは数ヶの研究題目を設定するを要せず、各部各班の裁量により上記文化領域の範囲内に於いて重点的に題目を選び次を追うて研究の歩を進める。これらの諸研究によつて我々は、内にあつては民主政治の推進、経済機構の整頓、文化国家の建設に寄与し、外に対しては非武装国家として世界平和に貢献すべき方途を見出しうであらう。

部門ト研究員ノ構成。 西亜 アジア

- 一、研究部の部門は、日本部・中国部・アメリカ部・ソビエト部・西欧部及び国際部に六部する。就中、日本部を重視し、他部の陣容の約二倍を目安とする。この点「東亜」もしくは「アジア」に日本を含むものとはばかり了解されているた在来の立場と大いに異なる。蓋し我々は、より謙虚に、先ず自らを知らねばならないからである。その反面我々は我が祖国をあくまで世界史的連関に於いて眺めねばならぬ。中国部・アメリカ部及びソビエト部が特に重視されねばならぬ所以である。同時に世界は現在一つへの方向に進みつゝある国際

部は特にその視点にたつて現代世界文化の動向を考察しようとするものに外ならない。ソビエト部は語学その他の制約上、ロシア語を以つてする直接研究の外、西欧語を介しての間接研究をも併せ行はねばならない。

研究所は、日本部・歴史班二名、理論班四名、政策班二名、他の五部は各々その半数、総計 名を教授とし、その下に助教授及び三級教官をおく。教授・助教授毎に一名づつ女子補助員(雇員)をおいて、資料の蒐集、統計の整理に任ずる。

研究の成果は定期および不定期刊行物によつてこれを公表する。

調査 資料室ノ任ム

- 一、調査部及び資料室は、純学術的解明への不可欠な準備手段としての、前記、現代諸文化現象の生態把握を当面の目的とする。ただその際調査室は専任及び(例へば学生の如き)臨時の調査員の動員による実態調査と、それによつて収輯された諸資料・諸統計の整理とを主要任務とし、資料室は内外各種の資料・統計・報告・小論等を含む定期・不定期刊行物の調査と、カードによるこれが内容索引の整備、並びにこれらの諸材料を利用した文献調査の遂行とを主要任務とする。調査員による実態調査の対象は、さし当りこれを日本内地のそれに限定せざるを得ないが、ゆくゆく(イ)或は出張の形式により (ロ)或は調査委嘱の形式によつて世界各地にも及ばさねばならない。日本内地につ (いても特に)は先づ近き乃至は西日本の実態調査にその特色を求め、それをもつて他地域の同種の機関と提携、互に□所補□の道を講ずべきである。) * ()の上に「法務局説明の写」
- 一、調査室及び資料室は、所内・学内の利用に應ずるばかりではなく、内部の研究に重大な支障を与へない限りに於いては学外の利用にも委せ、大学の内外を学術的に連結すべき門戸とする。□さ、調査員は学外者の需めに應じて特定の実態調査に従事し、(事実問題として今後は、進駐軍関係からの調査委託が多きを加えることを念頭に置かねばならない。) 資料室は或は文献調査の委嘱を納れ、又は資料・カード類の目録縦覧開放縦覧を行ふ。但し、費用を要する場合は委託者の負担とする。所内自発的な実態調査のためには、内国旅費・外国旅費・調査費等の形式をもつて、出来るだけ潤沢に調査費用が準備されねばならない。作成された資料及び索引・目録の類は、逐次にこれを公刊する。調査部の成果は質的に精選さるべ

く調査・資料室の成果はむしろ量的に多きを期したい。前者は籍すに最年月をもつてすべく、後者は限るに短時日をもつてすべきであらう。

各種の刊行物は編集室に於いてこれを出版するか、そのためには、出来るだけ潤沢な出版費の^(カ)造備と豊富な用紙の割当とがなされねばならない。

調査員ノ構成 総合調査委員会

一、調査員は、調査室・資料室を通じて二級教官七名、三級教官四二名、とし他に所員 名を置く。

二級教官七名は研究部門別に於いて六部に配当し、(日本部は二名) それぞれ研究部各班から選出された教授・助教授各一名(日本部は各二名づつ)とともに総合調査委員会を構成する。所長の司会の下に開かれる総合調査委員会は、実態調査並びに文献調査の企画について、全般的な責任と決定権をもつ。実施の技術的方面については三級調査官若干名を加えた各調査部会がこれを決定する。

一、地域別の研究部会を催して縦の連絡を図るとともに、歴史部会・理論部会及び政策部会をも設けて横の連絡を完うし、もつて総合研究の成果のより完全ならんことを期する。

1、人ノ和 2、研究の企画性

経済 文学 心理学者ヲ要スル

一、研究員及び調査員は、教授・助教授・二級教官・三級教官毎に、大学法学部、経済学部、文学部、農林経済学科 の比率を以て配分する。但し、若干の出入は互譲の精神をもつて善処すべきものとする。これと連関して各学部出身者間に於ける著しい処置上の不均衡も極力避けられねばならない。さもないかぎり、総合研究所の円滑かつ効率的な運営は至難である。

一、研究員・調査員の人選、研究題目の決定等の研究所の最高運営は、所長の司会の下に開催される協議員会がこれに当る。同委員会は特に研究内容・方法等について高度の企画性をもたねばならない。委員会は、所長・三学部長・農林経済教室主任・研究所専任教授全員・それぞれ助教授・二級調査官及び三級教官中から互選された法・経・文・農各一名づつ(小計十二名)を以つて構成する。

一、研究所と学部との連携については、

(イ)研究所陣容が大体、十五教授以上に強化された場合には、交流主義を最も善いと考える。即ちその場合(一)研究所及び学部^(カ)に同一分科の専攻者を有する時には転勤辞令をもつてこれを交流せしめる。ただし、研究部所の自主的学風を助成する必要上、所内に研究室を有する者は、例へば四年を所内に二年を学部^(カ)に、これに反し、学部^(カ)に研究室を有する者は四年を学部^(カ)に二年を所内に勤務せしめる。

(ニ)同一分科の専攻者を所内には有しないが、所内

の研究に必要な人員のためには、教授・助教授を通じて、例へば四五名程度の未補充の空席を残し、これを利用して転勤者を迎へ入れ、約二年毎に学部所属の他の研究員と交替せしめる。

(ロ)陣容不十分の時は、在来通り、兼務教官制を採るの外はない。但し、この場合、その経費は、出来ることならば、定員未補充による代員給捻出以外の方法によつて賄ふべきものと思ふ。

一、本研究所は固より実践者として政治的な責任を担当すべき機関ではない。にもかかはらずそれは、生きた世界を研究調査の対象にしようとする限りに於いて、予めそのよつて立つ政治的立場をはつきりさせて置く必要がある。

本研究所の政治的立場は、社会民主主義を中軸として相当幅広いものでありたい。否、相当幅広いながらも社会民主主義を中軸とせねばならない。この一線にして堅持される限り、内地及び外国所在の左右両翼の機関と研究並びに調査上の便益を交換しあうことも強ち忌避さるべきではない。むしろ積極的にこれを行うべきであらう。

一、研究所拡大案が削減若しくは繰延べを余儀なくされた場合の措置。(イ)(a)日本部の縮小、国際部の取消等による削減は好ましくない。(b)調査室・資料室のみの削減又は研究部のみのそれも好ましくない。(c)理論班の減員、政策班の取消等によるべきである。

研究部ノ拡大ハ確保スル

(ロ)繰延べの場合は(a)(イ)の(a)(b)に類する繰延べは好ましくない。(b)例へば日本部・中国部・アメリカ部等の拡充を第一期事業とし、他を第二期に廻すべきである。

「昭和二十一年十二月 機構拡大関係 人文科学研究所」綴による。鉛筆による加筆箇所は下線、抹消箇所は——、判読不明箇所は□、推測箇所には(カ)を付した。資料3~6は人文科学研究所蔵。

資料4 第一回北平旅行概況報告(1934年)

第一回北平見学旅行ノ概況報告

塚本善隆
能田忠亮
小川茂樹
長広敏雄
森 鹿三

昭和九年八月二十四日ヨリ同年十月二日(森研究員
ハ十月八日、長広研究員ハ十月十五日)ニ至ル今次ノ
北平見学旅行ノ主要ナル目的ガ各研究員専攻ノ立場ニ
基キテ其ノ研究上必要ナル史料ヲ蒐集スルニ在ツタコ
トハ勿論デアアルガ、一般ニ北平ヲ中心トシタル史蹟名
勝ヲ探リ多クノ學術機関ニ接触シ或ハ知名ノ学者ト会
見シ以テ支那學界消息ノ一端ニ通ズルナド皆重要ナル
目的デアツタノデアアル。

吾等ノ北平滞在日数ガ八月二十八日夕方ヨリ九月二
十八日朝ニ至ル僅カーケ月ニ過ギナカッタニモ閑ラズ
略々旅行ノ目的ヲ無難ニ遂ゲ得タルハ北平東廠胡同一
号東方文化事業部総委員会ノ一隅ヲ宿所ト為スノ便宜
ガ与ヘラレ其ノ主任橋川時雄氏以下ノ諸氏ノ同情アル
配慮ト指導ニ預カルヲ得タルガ為メデアツタコトハ云
フ迄モナイガ時恰モ京都研究所ノ囑託講師傅芸子氏ガ
夏期休暇ニテ帰省シテ北平ニ在リ我等ノ為メニ適当ナ
指導者ト成ラレタガ為メデモアツタ。更ニ如上ノ目的
ヲ遂グルニ、短日月ノ間ニ凝滞ナカリシハ我等ガ些カ
以テ中華國語ヲ話シ得テ自ラ行動スルニ何等ノ不便ヲ
モ感ゼザリシニモ因ル。茲ニ橋川、傅ノ兩氏ニ感謝ノ
微意ヲ表スルト共ニ我等ニ平生北平ノ文芸語言風俗及
ビ清朝掌故等ニ関スル質疑ヲ明ニスル機会ヲ与ヘ来リ
シ京都研究所ニ対シテ一層感謝ノ念ヲ禁ジ得ナイ次第
デアアル。

今北平ニ於ケル學術機関ニシテ見学シ得タルモノヲ
列挙スレバ次ノ如シ

故宮博物院(東側、中央、西側)。古物陳列所(即
武英殿)。三和殿(即太和殿、中和殿、保和殿)。国立
歴史博物館(即午門)。国立北平図書館。中央觀象台。
国立北平研究院博物館芸術陳列所。中法大学。清華大
学。燕京大学。地質調査所。等

又北平及ビソノ附近ノ訪ネ得タル史蹟名勝ハ次ノ如
シ

北海(中海、南海)。景山。孔廟。国子監。雍和宮。
天壇。法源寺。琉璃廠隆福寺。等

万寿山。香山。碧雲寺。十方善覺寺。玉泉山。明十
三陵(特ニ成祖文皇帝之陵)。

其ノ他
房山(西域雲居禪林、小西天)。大同(上下華嚴寺。

善化寺。雲崗)。等

又北平東方文化事業総委員会ノ諸士ト東京研究所ノ
北平見学旅行団ト共ニ招待シタル学者(但シ出席者ノ
ミ)ハ次ノ如シ

江瀚。常福元。楊樹達。楊允修。錢稻孫。孫人和。
楊維新。周叔迦。趙万里。劉節。倫明。傅芸子。傅惜
萃等

右ハ大体ニ於テ塚本、能田、森、長広、小川、五研
究員ニ共通ナルモノニテ各自ノ立場ニ基ク研究旅行報
告ハ別紙ノ如シ。

離平以後ノ経過報告

昭和九年九月廿六日北平ヲ出発シ陸路滿鮮ヲ經十月八
日歸所セリ。ソノ間奉天ニテハ惟、東陵ニ詣デタルノ
ミニテ、諸多ノ學術機関ハ他日見学スルコトトシ割愛
セリ。平壤ニ於テハ乙密台上ノ平安南道立博物館ニ樂
浪帶方郡及ビ高句麗時代ノ遺物ヲミ、更ニ大同江面ニ
於ル樂浪古墳ノ発掘作業ヲ親シク見学セリ。又平壤ノ
西南龍岡郡池雲面ニ存スル高句麗時代ノ遺跡、双楹塚
ヲモ訪ヘリ。京城ニ於テハ京城帝国大学図書館所蔵ノ
支那及ビ朝鮮ノ古地図、奎章閣旧蔵ノ典籍ヲミルヲ得
タリ。又同大学法文学部土俗陳列堂ニテハ秋葉赤松兩
教授ノ蒐集ニナル支那・滿州・朝鮮・等ノ土俗品ヲ見
学セリ。ソノ他、朝鮮総督府立博物館・李王家博物
館・朝鮮総督府朝鮮史編纂所・経学院等ヲ訪ヒ、支那
文物研究上尠カラザル裨益ヲ受ケタリ。

.....

北支滿鮮研究旅行報告

昭和九年八月二十四日ヨリ十月八日ニ至ル北支滿鮮
研究旅行ノ概況ハ前掲ノ共同並ビニ单独報告ニ略述セ
シ所ナルモ本員ノ立場ヨリ今次旅行ニ於テ関心ヲ持チ
シ二三ノ事項ヲ左ニ記スベシ。

一、書籍

傅增湘氏蔵宋刊水經注殘本

右書ハ傅氏双鑑樓善本書目ニ「水經注十二卷宋刊殘本。
十一行二十字。白口双闌。版心下記刊工姓名。存卷五
至八。十六至十九。三十四。三十八至四十。」トアル
モノニテ、詳シク言ヘバ、卷五ハ卷末七葉アルノミナ
リ。又宋諱闕筆ハ桓構二字ニ至ツテ止マリ光宗ノ嫌名
敦字ハ闕カザレバ蓋シ宋南渡初ノ刊本ナラン。原来内
閣大庫ノ物ナルモ、劫火ニ燬カレシヲ綴拾セシ為メ全
紙赤褐色ヲ帯ビ、右上隅ハ殆ド焼失シ居レリ。

東方文化事業総委員会図書館籌備處蔵大明一統名勝志
右書ハ四庫全書総目史部地理類存目ニ「輿地名勝志一

百九十三卷。明曹学佺撰。学佺以博洽聞。著述甚富。是書則由雜採而成。頗無倫次。時亦舛譌又多不著出典。未為善本。」トアルモノ。本来稀觀ノ書ニ屬ス。籌備處所蔵ノ書ハ旧、繆荃孫ノ収蔵スル所ニシテ、中ニ雲自在勘鈔ト記セル藍闌ノ用紙ヲ以テ補鈔シアリ。存目提要ニハ此書ノ諸書ヲ雜採シ倫次ナキヲ譏ルモ、ソノ中ニ引用セル水經注ノ文頗ル豊富ナリ。全祖望ノ「引用水經注文者。前無過於樂永言。次無過於胡身之。後無過於曹能始」(水經注五校本題辭)ト言ヘル如ク樂史ノ太平寰宇記・胡三省ノ資治通鑑注ト共ニ水經注ヲ引クコト最モ豊富ナル書ノ一ニ算ヘラル。全氏ハ更ニ言ヲ続ケ「能始所采之本。逸文亦甚不少。豈以石倉蔵書多。或及見元祐以前旧籍。乃竟有出於永言所未見者耶。」トテ曹学佺引ク所ノ水經注ノ善本ナルヲ称シ居レリ。又趙一清・楊守敬等モ亦此書ノ引ク水經注ニ拠ツテ今本水經注ノ誤脱ヲ訂補セルモノ少カラズ。

二、輿図

国立北平図書館ニ於テハ青緑ヲ以テ着彩セル北方辺口図及ビ湖広荊州府図ヲ見ルヲ得タリ、俱ニ前清内閣大庫旧蔵ノモノナリ。又京城帝国大学図書館ニテハ数多ノ朝鮮古地図ノ外、明書一統輿図及ビ康熙銅版一統輿図二十七帖ヲ見ルヲ得タリ。

尚、北平ニ於テ奉天・河南・山東・陝西・湖北ノ十万分一図及ビ河南二十万分一図等ヲ蒐集スルヲ得テ当研究所ニ将来セリ。

三、景観

一小部分ナリト雖モ北支ニ於ル自然文化ノ景観ニ親シク接スルヲ得タルハ沿革地理解釈ニ資スルコト少カラズ。今、水經注ヲ以テソノ及ブ所ノ二三ヲ述ブレバ、石經山(共同報告ニ房山小西天ト記シ居レリ)ハ聖水注ニ所謂甘泉水ノ發源スル良郷西山ニ比定スベク、雲岡ハ即チ深水注ノ靈巖ニシテ、酈道元ハ当時ニ於ル石窟寺ノ情況ヲ描写シテ「鑿石開山。因巖結構。真容巨壯。世法所希。山堂水殿。煙寺相望。林淵錦鏡。綴目新眺。」ト言ヘリ。又明陵ノ地ハ濕餘水經ニ所謂芹城水ノ發源スル昌平北山ニ擬定スルヲ得ベシ。

右ノ通り報告仕候

研究員 森鹿三

東方文化学院京都研究所々長

狩野直喜殿

.....

北支見学報告

塚本善隆

別紙ノ如き一行五名と共々になしたる一般的見学の外に、私個人の第一目的たりし、支那仏教研究資料の蒐集の上になし得たる主なるものは次の如くである。

一、金刻藏經の調査

昨夏山西省趙城県の一山寺より、金の天眷等の刊記ある一切經が発見せられしこと、その一部が北平にもたらされたることは、かねて橋川・傅両氏より伝聞し居たれば、今次の旅行に、その一本にても披見せんとは出發当初よりの念願であった。北平にもたらされ居る概經卷は、法相宗関係のもの(三時学会)と、目録に関するもの(北平図書館)とにして共に出版の計画ありて、他人殊に外国人に閲覧せしむることは許されずとのことなりしが、徐森玉氏に懇請せし結果、氏は密かに概經卷の大半を、東方文化事業部図書閲覧室に持参せられ、これを写真することさへ許されたり。各經は、その金刻本たるものが、学界新発見のことたる上に、何れも今日の一切經中に伝はらざる典籍であり、殊にその目録部の諸本の如きは北宋の仏典翻訳の事業を、極めて詳細に伝ふる貴重資料なるを知り得たれば、数日を費やして、主要部の抄出をなし、また多数の写真を取り帰たり。その仏教資料としての重要性の概要は、来る本研究所開所記念講演会に報告する予定である。

二、宋会要「釈道部」並に「祠部」の項の抄写

夙に散逸せし宋会要は、全唐文編纂に際し、徐松によって永樂大典中より抄出編纂せられしが、この抄出本も公刊を見ざる中に、転々して終に上海の劉承幹氏の蔵に歸し、劉氏は更に徐松本に刪補を加へたる編定本を作れり。わが東洋文庫がこの抄本によって作り得て所蔵する、僅かに食貨・蕃夷の兩部すら、宋史研究の貴重資料として珍重せられ居るものなるが、私等は北平にて、劉氏編定「宋会要」稿本の全部が、上海より北平図書館に借出され居ることを聞けり。勿論これも内密にされ居りて、公開を許されざるものなりしが、はからずも北平図書館楊維新氏の尽力により、徐松本、劉承幹本の兩者の全部を見ることを得、その中に宋仏教史研究上の極めて貴重にして豊富なる資料の存することを知りたれば、約一週日にわたりて、昼食をぬきにして重要部分を抄出し、「釈道部」並に「祠部」の項の大半を筆写し得たり。その内容につきても前者と共に来るべき記念講演会に報告する予定である。

三、房山県石經山及び雲居寺の調査と資料の蒐集

旅程と雨天との為に、概地における調査は十分なるを得ざりしも、約百枚の拓本を購ひ来りたれば、この重要な仏教遺蹟遺物の研究は、相当詳細になし得る考へである。

四、米国人 Sickman 氏蒐集の六朝造像の拓本を見、且つその若干を写真にし得たること。これは、私の今期の研究題目に直ちに利用され得る資料のみなり。これを得たるは主として傳講師の尽力による。

五、国立北京大学仏教学教授周叔迦氏等と意見の交換をなし、且北平及び全支に於ける現時の仏教学界の大

勢につきて聞くことを得たり。

以上五項は、私の今期の研究題目たる「金石を中心とせる六朝仏教の研究」を達成する上に、全部が資料となるものではない。而も、私が全生涯をさゝげてなさんと志せる「支那仏教史」の研究の上には、全てが極めて貴重なる資料であり、四十日の見学としては浅学なる私にとっては、殆んど望外の収穫であった。更に或は支那の学者達と相識り、或は彼の學術機関を親しく見学して研究上の暗示を得、或は研究に必要な書籍・拓本等を容易に、少なからず入手し得たる等、数へ来れば、私は今次の旅の有意義なりしことを心から喜ばざるを得ない。而してこの種の見学旅行が年々行はれ、同僚諸氏が進んで喜んで参加せられことを希望し、且各個専攻学科の相違により、個々の必要に応じて北平以外の地方への見学旅行の機会も与へられんことを懇願する次第である。

.....

昭和九年十一月三日

天文学史研究ノ立場ヨリ見タル北平見学旅行
能田忠亮

東方文化学院京都研究所
所長 狩野直喜殿

天文学史研究ノ立場ヨリ見タル北平見学旅行
能田忠亮

今次ノ北平見学旅行ニ於テ天文学史上、余ノ最モ興味ヲ覚エタルハ、先ヅ中央觀象台デアル。

(一) 中央觀象台 天象ノ昭示アリテ聿メテ興ル。是ヲ以テ觀象台ノ設アリ。凡ソ世界ノ觀象台中、其ノ設立甚ダ早クシテ、觀測事業ノ今ニ至ツテ輟マザルモノ、北平ノ中央觀象台ニ如クモノハ無イ。其ノ歴史ノ明白ニ考フベキモノ、蓋シ八百有余年デアル

何人モ知レル如ク、北京ハ、遼・金・元・明・清ノ五朝ヲ通ジテノ都会デアル。遼・都ヲ燕京ニ移シテ後、外患迭乗シテ、天文事業ノ發達ハ余リ見ルベキモノガ無カッタ。金・靖康ノ役ヨリ、宋室ノ汴ニ在ル法物ヲ取りテ燕京ニ輦致シ、海陵王ハ其ノ貞元二年ニ始メテ銅渾儀ヲ太史局候台ニ置イタ。元初ハ金ノ旧ヲ沿襲セシモ、至元十六年ニ至リ、始メテ司天台ヲ建テ、伝ヘテ今日ニ至レルモノデ、仍、旧址ニ沿ヒテ、未ダ稍モ移動セズトイフ。惟フニ、元ノ時、都城南牆ハ、今ノ東西長安街ニ亘ル。故ニ元代ノ觀象台ハ南城外ニ在リ。明ノ永樂十七年、城ヲ拓イテ南シ、觀象台ハ遂ニ城中ニ括入サレタノデアル。即チ今ノ崇文門内、泡子河ノ

北貢院ノ南ニ存在スル事トナツタ。即チ、今ハ、北平ノ東南隅ニ当リ、裱背胡同ノ東端ニ位スルコト、ナリシモノニテ、清代之ニ因リ、民国肇メテ興リ、改名シテ之ヲ中央觀象台ト呼ブ。按ズルニ、觀象台ハ、金ニハ候台トイヒテ太史局ニ屬シ、元ニハ司天台トイヒテ太史院ニ屬シ、明ニハ觀星台、清ニハ觀象台トイヒテ、共ニ欽天監ニ屬シ、民国ニハ中央觀象台ト改称シテ教育部ニ屬セシメテ居ル。以上ヲ北平中央觀象台沿革ノ概略トス。

(二) 觀象台ノ天文儀器 今日台上ニ保存サレタル天文儀器ハ八種ニシテ、東ヨリシテ西スレバ、赤道經緯儀ヲ首メトシ、次ハ紀限儀、次ハ地平經緯儀、次ハ地平經儀、次ハ黃道經緯儀、之ヨリシテ北スレバ天体儀、次ハ象限儀、之ヨリシテ更ニ折レテ東スレバ、璣衡撫辰儀アリ、此ノ内、天体儀、黃道經緯儀、赤道經緯儀、地平經儀、象限儀、紀限儀ノ六器ハ、上記ノ順ニ、康熙十一年ヨリ十三年ニ至ル間ニ成リシモノニシテ南懷仁ノ立法ニカ、ル。地平經緯儀ハ些カ以テ異トスベキモノニシテ、儀象考成ニハ、

康熙五十二年。命監臣西洋人紀利安製地平經緯儀。トアリ、清會典ニハ、

地平經緯儀。康熙五十四年製。

トアリ、美国一九〇〇年、司密遜学会報告ニハ、

係法王魯易第十四。所贈与康熙者。

トアリ、未ダ何レヲ是トスベキヤヲ知ラズ。最後ノ璣衡撫辰儀ハ、乾隆九年ノ御製ニカカリ、清一代ノ傑作トセラレテ居ル。以上八種ノ内、余自ラ試ミテ操作シ得タルハ天体儀ノミニシテ、他ハ多ク錆ビ附キテ可転シ難シ。此等ノ天文儀器ヲ觀レバ、康熙乾隆ノ頃ノ天文ガ如何ニ盛大ナリシカ、ハ憚ラレバ。此等八種ノ天文儀器ニ関スル天文学的記載ハ、将来之ヲ東方学報京都第何冊カニ發表スベシ。故ニ此処ニハ省イテ述ベズ。

茲ニ余ノ最モ遺憾トスル所ハ、璣衡撫辰儀ト共ニ乾隆九年ニ製セラレタル圭表、同ジク乾隆十一年ニ製セラレタル漏壺、並ニ明ノ正統年間ニ製セラレタル渾儀及ビ簡儀(但シ其ニ起源ハ元ノ郭守敬ノ特創ニカ、ル)ノ四器ノ、今ハ移サレテ南京ニ在リ、今次ノ旅行ニ於テハ、親シク見学スルヲ得ザリシコトデアル。蓋シ、此等ノ四器ハ、天文学史上何レモ重要ナルモノニシテ、殊ニ圭表・渾儀・漏壺ノ三器ノ歴史ハ即チ支那天文学發達史上重要ナル位置ヲ占ムルモノデアル。茲ニ圭表ハ蓋天説ノ代表的觀測器デアリ、渾儀ハ渾天説ノ代表的觀測器デアリ、圭表ハ前漢ノ武帝以前ニ其ノ起源ヲ求め得ベク、渾儀ハ武帝以後ノモノナルベク、余ハ嘗テ、既ニ

漢代論天攷(東方学報京都第五冊所収)

ヲ發表シテ、這般ノ消息ヲ明カニシタノデアルガ、近キ将来ニ於テ南京ニ赴キ、親シク此等ノ天文儀器ヲ詳細ニ実測シ得タランニハ、更ニ其等ノ儀器ノ天文学的意義ヲ明カニシ、并セテ天文学史上ニ於ケル其等儀器ノ

位置ヲ確立セント欲スルモノデアル。

(三) 観象台下ニ於ケル雍正六年夏五月建立ノ碑ニ就キテ 観象台構内ノ气象学事務室ニ至ル門ヲ入りテ、首ヲ右ニメグラセバ、則チ高サ八尺バカリノ碑アリ。此ハ清ノ雍正六年夏五月ニ建テラレタルモノニシテ、雍正三年正月二十七日ニ五星ガ亥（・子・丑）宮ニ聚リタタルヲ瑞祥トシテ聖徳ヲ祝シタルモノニシテ、碑ノ穿ニ当ル所ニハ、其ノ時ノ天象ガ刻マレテアル。而シテ此ノ天象ハ即チ台上ノ儀器ヲ以テ観測サレタモノデアル。余ハ近ク其ノ拓本ヲ得ベキ手配ナレバ、ソノ天象ノ正確サヲ検討シ、以テ当時ニ於ケル五星推歩ノ程度ヲ確メントスルモノデアル。此ノ機会ニ於テ、余ハサキニ発表シタル秦ノ改時改月説と五星聚井ノ辨東方学報京都第五冊ノ補遺トシテ、漢ノ元年以来清ノ雍正三年ニ至ル「五星聚」ノ記事ヲ尽ク蒐集シ、「五星聚于某宿若某宮」ノ程度ヲ明カニシ、并セテ其ノ星占的意義ヲ糺明セントスルノ意図ヲ有ス。但シ、五星聚ニ関シテハ歴代正史ノ律歴・天文・五行志ヲ参照スベキデアアルガ、既ニ顧炎武ノ「日知録卷三十」ニハ、其ノ材料ガ整理サレテ居ル。素ヨリ雍正三年ノモノヲ含ム道理ガ無イ。

(四) 其ノ他見学シ得タル天文学関係ノモノハ、古物陳列所即チ武英殿ニ於ケル乾隆頃ノ製作ニカ、ル大時計、故宮及び国子監ニ於ケル日晷、三和殿中ノ中和殿ニ於ケル星宿亭^{雍正年間ノ作品}、中法大学、清華大学ノ天文書、北京大学ノ明清史料整理室内ニ於ケル康熙五十四年ノ曆、湯若望ノ建白書等。

(五) 見学シ得タル善本秘冊 隆福寺脩綆堂ニ於ケル明刊崇禎曆書、天学初函^{何レモ徐光啓等ノ撰}及ビ薛鳳祚ノ天学会通、天歩真原ノ原刻本等。何レモ京都研究所ニ購入シ得ベキモノニシテ、正ニ崇禎曆書、天学初函ハ京都研究所蔵書ノ一異彩タリ。

.....

専攻研究題目「漢代ノ工芸」ニ関スル見学並ビニ資料蒐集報告

研究員 長広敏雄

今次北支那見学旅行ニ際シ小員ノ研究ニ関シ特ニ注目サレシモノ次ノ如シ。

1. 故宮博物院寿皇殿収蔵ナル支那古銅器。
2. 故宮博物院歴史博物館（午門）収蔵ノ各種発掘品
3. 国立北平研究院歴史部展覧会陳列品
 - イ. 陝西宝鸡縣鬪鷄台戴家溝東乙坑出土漢代遺物（民国廿三年採集セル一群）
 - ロ. 仏教美術ニ関スル注目スベキモノノ
 - 北平德勝庵鉄影壁ノ浮彫（写真出陳）
 - 夕照寺陳寿山壁画（写真出陳）
 - 普安寺旃檀仏像（写真出陳）

万善山大悲観世音像（写真出陳）

4. 国立北平図書館金石研究室収蔵周漢拓本
5. 米人ローレンス シツクマン氏収蔵漢六朝拓本
6. 山西大同雲崗寺石窟
7. 房山西域雲居禪林北塔下部構造並ビニ唐様式浮彫
8. 北平城内ニアル各種支那古美術店保管ノ周漢六朝美術品
9. 関東州旅順博物館
10. 関東州旅順宮城子漢代磚槨墳二基
11. 北朝鮮平安南道大同江面楽浪郡遺址、殊ニ本年八月以降調査発掘中ノ將進里本槨墳三十一号、磚槨墳四十五号、貞柏里木槨墳十九号、石巖里木槨墳二百十二号、
12. 北朝鮮平壤府立平壤博物館
13. 朝鮮京城府総督府博物館
14. 朝鮮京城府李王職博物館

小員ハ右ノ各種収蔵品中、漢唐ニ亘ルモノヲ主トシテ調査シタリ、ソノ整理ト論述トハ別ニ東方学報ニ発表スベキヲ期ス。

右、昭和九年北支那旅行報告候也

昭和九年十二月十日

研究員 長広敏雄

東方文化学院京都研究所長狩野直喜殿

.....

小川茂樹

今回ノ旅行ニ於テ本研究員ノ目的トシタ金石文資料ノ来訪取覧ニ就テハ、橋川氏傳氏等ノ紹介ニヨリ學術機関及ビ個人ノ収蔵ノ參觀閱覧等ニ望外ノ便宜ヲ与ヘラレ、最モ期待シタ河南洛陽方面ノ旅行ガ該地域ノ事情ニヨリ不可能ニ帰シタガ、却ツテ前記ノ方向ニカヲ集中シタ結果、大体所期ノ目的ヲ果スヲ得タ。

見学セル公共學術機関ニ於テハ

一、国立北平図書館 同館金石部主任劉節氏ノ好意ニヨリ、同部所蔵ノ金石文拓本等ヲ自由ニ閲覧スル事ガ出来タ。特ニ金文拓本中積古齋蔵器文拓本一卷、簠齋金文二十冊ガアル。前者ハ阮元著積古齋鐘鼎彝器款識中ノ摹刻ノ失ヲ訂シ、又進ンデ原銘文ノ真偽ニ関スル疑問ヲ氷釈シ得タ点、又後者ハ極メテ精拓本デ、然モ鑑選厳重デ殆ンド偽疑ノ文ヲ収メナイ点ニ於テ貴重デアアル。金石文資料ノ取覧・整理・研究ノ方法等、同部ノ實際ヲ見学シテ大イニ裨益ヲ受ケタ。

一、北京大学文學院 同助教授陸宗達氏ノ先導ニヨリ各研究室、図書館ヲ參觀シ、考古学陳列室ニ於テハ紀年銘アル漢代墓石、甲骨、同拓本等ガ注目セラレタ。

一、国立北平研究院 同院五週年記念展覧会ガ九月九日開催セラレルニ際シ、同博物院ニ於テ、最近同院ガ

陝西宝鸡県祀鶏台ノ発掘品ノ出陳ヲ見タ。同台ハ周代古銅器ガ先清時代ニ出土セル所ト伝ヘラレ、ソノ発掘ガ充分科学的ニ行ハレズ、層位関係ノ不明ナル等遺憾デアルガ、前記ノ意味ニ於テ注意スル価値ガアル。

個人ノ收藏品ニ於テ

一、在平米人史克門ノ元朝造像拓本展覽ニ際シ、ソノ優秀品十余種写真撮影スルヲ得タ。

一、傅增湘ノ蔵書 金石資料以外デアルガ、同氏蔵北宋淳化版史記集解ヲ一見スル事ガ出来タ。宋代史書監本中最古ノモノデアルガ、同ジク北宋版小字本集解ニ比シテハ本文ノ校訂等尚不充分ノモノノ様デアツタ。

又北平市外房山西域寺ニ泊旅行ヲ試ミ、唐代塔銘、石經等ノ拓本ヲ集メタ。史克門蔵拓本ト共ニ塚本研究員ノ委細研究報告ガアラウ。

金石文資料、特ニ金文拓本ノ収蒐

一、故宮博物院所蔵器文拓本 同院所蔵品ガ大部分南方ニ運び去ラレ、一部ハ散逸セル今日、ソノ旧拓ノ収集ハ最モ急務デアル。取り敢ヘズ入手シ得ル大鼎以下主要ナルモノ十余種ヲ購入シタ。

一、張伯英旧蔵金文拓本叔器父殷以下数十種、主トシテ盛京故宮蔵器拓本デアル。

一、姚華旧蔵金文拓本写真 番生殷蓋以下十余種

又河南博物館所蔵ノ殷虚出土甲骨文及ビ漢魏六朝唐代等ノ石刻ノ拓本購入ノ手筈デアルガ、現在尚未着デアル。

北平滞在中、北平図書館劉節氏ノ招宴ニ長広研究員ト共ニ列シ、徐中舒・唐蘭・呉其昌、米人顧立雅氏等北平ノ金石学者ト会シ、甲骨文金文ノ研究方法、及ビ日支金石学ノ現況等ニツキ隔意ナキ意見知識ノ交換ヲナシ得テ、頗ル愉快且ツ有益デアツタ。

資料5 アフリカ通信 (1961年)

第一信 (Nov. 11. 1961 Dar es Saraamにて)

ホンコン・バンコック・カルカッタと空路平穩に過ぎてボンベイ。

5日、ナイロビ空港午後4時着、伊谷の出迎えを受ける。Ainsworth Hotelに投宿。此処には日本商社の人々が数人泊っており、その上に日本からきたキレイナファッションモデルまで一人泊っている。そして久しく日本女性を見ていない人々に取りまかれ、引っぱりダコになっているらしい。夜林田総領事の公館訪問。

6日、Dar es にいる東・片寄では25トンの荷物さばきに手が足りないというので富田をダレスにとばせた。Liekieに会う。彼は前言をひるがさない。よって吾々はKabogo pointに基地建設を決意した。

7日、赤道アフリカへ来ているのに雨期のせい気温あがらず肌寒い。

8日、今西・伊谷・富田ダレスへ移動、全隊員はじめて集結、ホテルはNew Metropolis、二流どころ。先発隊の努力により荷さばきは殆んど完了していた。此処もこの間からよく降ったそうだがNairobi (1500m)からくるとさすがに暑い、これではじめてアフリカへ来たという気がする。

9日～11日、出発の準備、自動車もいよいよタンガニカのナンバープレートをつけて今日から市中を走るだろう。明12日(日)東・片寄の先発隊は車でキゴマに出発、富川・富田のEyasi隊は1台のトラックと1台のランドクルーザーで、Arusha経由OldeaniのKielandのところへ向って出発。但しこの間からの雨で道路の通れぬところが大分できてきているらしい、また出発後も雨の為に途中で立往生する危険なきにしもあらず。うまくいけばOldeaniに荷物集結のち基地建設を手伝うべく20日頃にはEyasi隊もKigomaに到達する予定。Kabogo隊はKigoma到達後、できる限り早くKabogoへ渡って基地候補地を探し、11月中にこの予備調査を完了、12月一杯かゝって基地の建設(もちろんChimpsの調査の方も並行的に行う。)、ボクの誕生日は全員基地でこれを迎えたのちEyasi隊と片寄が基地を離れる。

今西・伊谷はその后2月なかばまで基地に止まりKigomaから一度南タンガニカのMbeya方面に偵察行をしたのち、Dodomaに出て約1ヶ月間Eyasi隊

と行動を共にし、4月10日頃Nairobiに戻る。それから予定通りだとローデシア、西アフリカ、南米を経由して5月はじめに帰る訳だがいろいろな事情で予定は刻々にかわるであろうからその都度おしらせすることにしたい。

当分の連絡先は右記の通り。

Dr.Kinji Imanishi
Kyoto University African Primatological Expedition
c/o P.J.C.Haynes.Esg.
Tanganyika East Africa (いまにし記)

第二信 (Nov. 27. 1961. Kigomaにて)

11月

14日 今西・伊谷 Dar es Saraam 発、これで全員奥地に向ったことになる。車中二晩をあかし、16日早朝Kigoma 着先発の東・片寄と合する。

一寸途中の景色を知らせておこう。眼がさめた時汽車はDodomaにとまっていた。ここはもうタンガニカのどまんなかである。土が露出し、ところどころアカシヤにまじって巨大なBaobabの木が立っている。長方形で屋根が平らな土の家、家畜の群れ、強烈な光線、これはどうみても乾燥したO地域の風景である。NairobiやDar esであんなに雨の降っていたことを思うと、何という変り方だ。併しこれで始めてアフリカ大陸へ来ているという気持ちになる。その日の中に汽車は更にItigi附近で灌木原をつききって走る。灌木といっても3mも4mもある。灌木原を抜けると始めてWoodlandあるいはopen forestといわれているvegetationにはいる。丁度雨期に入ったところで新芽が出たばかり。ところが更に西するにつれて、緑が濃くなっていく。汽車の窓からは動物も人間も見られない。人間の営み一たとえば道のようなものさえ殆んど見かけない。いまだこんな莫大な未利用地が捨ててあってよいものだろうか。

17日 Kigomaではまた毎日のように雨が降っている。対岸にCongoの山が見えている。ホテルにはCongoから逃げてきたベルギー人の一家が泊っている。先発のチャーターしておいた船でまづGombeを見に行く。Kigomaから30分の所で既にChimpの巣を発見、グドーに会うつもりはなかったが彼女は丁度campにいたのでアイサツだけして帰った。美ボウの誉れ高いグドーもマラリヤのせい、大分やつれてみえた。それがかえって彼女を気高く見せた。片寄などはこのグドーを見たとき涙がこぼれたという。

18日 Ujiji へ行って、例の Livingstone と Stanley の邂逅の記念碑を尋ねたがこの Ujiji の丘の上からはるか彼方にはじめて吾々のねらっている kabogo point を望む。

19日 ひと晩泊りの予定で Kigoma から外装エンジンつきの船で出発、波高く Masaka 岬をまわりきらぬうち待避、雨のやみ波の静まるのを待つて更に前進をはかったけれども日既に暮れ、kabogo は遠い。Kiti 岬に近づくと月あかりに浮かれて踊っているのであろうか、タイコの音がきこえる。Kiti 岬をまわったところで接岸、たまたまこの Karago という村に Kabogo をも含めたこの附近一帯の酋長がいるというので湖岸に camp。ザブンザブンと岸を洗っている波の音に眼ざめる。カヌーに集った者が綱をあげている。やがて獲物を持って岸に帰ってきた。いろいろな魚がいる、タイやボラに似たのやら何れも海の魚に似たものばかり。早速 3 シルほど買う、食べきれぬくらいある。今西・伊谷は通訳を連れて酋長のところへ D.C. の手紙と土産物を持って出かけた。Kabogo までは行けなかったけれどこれでこの偵察行の目的の一つは達した。基地建設の為の労働力をこの酋長に頼んだのち、帰りに Ilagara へ寄ってみることにする。海上輸送は湖水の荒れ方如何によっては Kabogo まで一日でむづかしいということを経験したので Kigoma — Ilagara 間をできれば陸上輸送に切りかえようと考えているのである。

さて Ilagara へいくにはこの附近で最大の河である Maragarasi を一時間近くも遡らねばならない。その Maragarasi の河口を探すのにひと苦労したのち船はようやく河に入った、風景も気分もなかなかよろしい。船の上から声をかけ手を振ると川岸に出て洗濯をしている娘さんやオバハンが必ず手を振って応えてくれる。Ilagara の埠頭着。驚くほど大きなカボックの木陰の茶店でチャパティを買って昼めしがわりにした。Kigoma からバスが毎日来ていることを確かめたのでこれなら代案でいけそう、但し路は大分悪いらしい。Ujiji で船をすてヒッチで Kigoma へ帰ったが船の Kigoma に着いたのは 9p.m. だった。

21日 Kampala から呼んだドライバーのブゲニヤ（昨年伊谷の使った方）とセクンデが到着、貨車で送った荷物も自動車を含む最後の便が到着、これでいよいよ人間も荷物も Kigoma に集結を終わった。なお人類班の富川・富田は Oldeani に荷物集結ののち基地建設の応援の為、25日午後に当地到着の予定。

23日 荷物の整備も終り、いよいよ第二次 Kabogo 偵察である。こんどこそ Kabogo に上陸せねばならぬ。

ブゲの運転で「熊襲号」は快適に走る。人間の住んでいる地帯を一時間程で走って丘陵にさしかると、もはや自然の中に入ってしまう。この自然とは新緑の open forest だ。bushbuck, forest big, baboon などが隠見する。林床はこれも萌え出たばかりの青草でどこもかしこもピクニックのお弁当を開くの好適なところばかり、但しこの草も雨期の終り頃になれば、背丈を越す程にのびるのだらう。ぬかるみにかかる。2日 天気が続かぬば通れないと云われている道だ。併しブゲの老巧な運転とわがトヨタのランドクルーザーの馬力でどうにか突破、Ilagara まで 4 時間かゝった。前日中に廻送してあった船に乗りかえ、Maragarasi をくぐる。湖へ出ると波の調子があまりよくない。Kiti 岬はまわったが、また待避を余儀なくされ、さきに camp したところの近くに上陸、波の静まるのをまつ。どうせ夕方まで待たねばならないだらう、そしたら月の出を待つて出かければよいのだ、悠々として夕食の準備をする。こういう夜襲作戦は山登りでも何度か使ってきた手である。村の者が現われ、Kabogo は断崖絶壁で危いからよせといふ、通訳始めアフリカ人に間に動揺の色が見えたが、これも今迄にいやという程経験してきたところだ、押し切って 9 時出帆する。月は十六夜、船は快調に進んで夜半近くいよいよ Kabogo 岬に近づき、予定した入江に上陸、砂浜の上には一面に tembo (ゾー) の足跡、しかしこれでやっと人界を絶したところまで来た。Gombe をすて、この Kabogo を選んだことは本懐である。

翌日は船でさらに岬をまわり、ゆけるところまで南下するつもりだったところ、朝から波が荒いうえ、9 時頃から土砂降りの雨、昨夜は水溜りにすぎなかったような camp の横の川がみるみる増水し、浸蝕がはじまり、一時は camp も危いかと、思われた。午後は雨がやんだので基地の選定に行ったが波荒く camp の前まで帰っていながら、容易に接岸できず、今西・伊谷はかろうじて船から上陸したが、東・片寄は遂に裸になって水にとび込むしまつ。

25日 波がおさまったので昨日みつけておいた基地の近くへ camp を移動、ここに伊谷・東・ブゲニヤを残して、今西・片寄は送缶の受取並びに人類班を迎える為、そのまま Ilagara にひきあげる。途中に Karaga の酋長に会って、基地建設用人夫の日当の交渉などをす。Ilagara からは「熊襲号」に乗り、セクンデの運転、8p.m. Kigoma 帰着、人類班は 28 日到着との入電あり、缶は当地には未着なるも明日にはつくはず。

今後の予定、D.C. からのお達しで Ufuru (独立の日 12 月 9 日) の前後は万一のことを慮って、Kigoma に帰っておれとのことなので、この為基地建設に違算

をきたし、約一週間ほど損をすることになる。29日に人類班を加えて再び Kabogo にむかい、7日に Kigoma に戻るべく、その間は基地用地の bush の伐り払い、地ならしなどをする。伊谷・東はひきつゞき chimp の予察、Ufuru ののちに全部の荷物を基地に輸送、本格的な基地建設にとりかゝ予定。

(いまにし記)

第三信 (Dec. 14. 1961 Kigoma にて)

富川・富田の人類班をむかえ、今西・片寄はセクンデの運転するランドクルーザーに乗って27日 Kigoma 出発。3時間10分で Ilagala 着。こゝから船に乗り替え、みちみち基地で使う案内人1名人夫5名を収容して Rugufu の河口まできたところ、エンジンに故障を生じその夜は接岸して舟の中で biwae。翌朝10時すぎ伊谷・東・ブケニヤの待っている Kabogo に上陸。伊谷らの偵察によって基地にするには Kabogo 岬を廻って更に南下した Mkuyu の方が好適であることがわかったので食事後伊谷らに乗せて更に南下、Mkuyu にむかう。ここは基地建設地としてはまことに好適である。尾根の末端が平らになったところで、木立の中だが前には草地があって海を望み、後の谷から水がひいてこられる。全員一致でここと定め、テントを海岸に張った。しかるに2日後になって谷の水が一滴もなくなっていることを発見、更めて乾期でも水の切れない場所を探し求め、基地建設地の変更を余儀なくされた。前の場所には劣るけれど、やはり尾根の末端の上で水害の恐れがない。それから建設工事の第一段階として、海岸からここまで約200mほどの物資搬入路をつくり、同時に基地の地ならし、水場までの路づくりなどを行った。この間伊谷・東は毎日山へ登ってチンパンジーの偵察をおこなったが、滞在6日間で、4日はチンパンジーにぶつかっている。そしてここには5~6群れがいるという結論を得た。チンパンジーは人間が近づいてもゴリラのように声をたてたり攻撃したりしてこない。併し逃げ足の早い点ではゴリラとかわらない。山の上にあがってみるとむこう側は無人類地帯で、open forest やサバンナがベター面にひろがり、そこには象や水牛がたくさんいるそうである。われわれがこれから追求しようとする、群れがはたしてこの山のむこう側まで遊牧するものかどうかはまだ確かではない。

われわれは Dares で魚釣り道具を仕入れてきた。トロールといってリールを使い、船からスプーン(クツペラに似たもの)を流す方法である。今迄も試みてみたけれど船が早すぎて一回も釣れなかった。ある日の夕方、Kigoma から連れてきたマンボーという青年

がカヌーに乗って釣りに出かけたところ、驚くなかれ1mに達する巨大なサンガーラを始め、数匹の獲物を仕とめて帰ってきた。サンガーラはススキに似ていて、アライにすればさぞかしいかすだろうが、刺身としてうまいのはクーヘという魚でその味はハマチそっくりである。サンガーラの方はむしろしお汁にした方が料理も簡単でうまい。海岸からはまたコロゴというアジを少し細長くしたような魚が釣れる。これも大きいのは30cmくらいあって塩焼にするとちょっとうまい。作業後に1時間ほど釣り糸をたれることができるのは楽しいではないか。併し作業後のひと風呂というかわりに日本人もアフリカ人も殆んど水浴し、水泳している。早朝に泳ぐのも快適である。しかし日中はダメ、なぜならこの湖は湖面に日が射しはじめると、なにかまだよく正体はわからぬが一杯に緑色のプランクトンのようなものが発生して、水が緑色に濁ってしまうのだ。夕方になるとまたそれが消えてきれいになる。だから飲料水は朝の中に汲まねばならない。波がたちだすと湖岸の水は濁るので、こんな日も泳げない。毎日の干満がどの程度あるかよくわからぬが、波のひどく打ちよせるような日にはかなり水があがってくる。滞在中一日波の高い日があり、夜通し耳もとでゴゴと波の音がして、嵐が稍をゆすぶっているかのようだった。というのもこの波は海の波のように規則正しく、寄せたりひいたりしないで、不規則で連続的だからである。始めはそれがわからずこんどはひく番だと思って走ったのに波をかぶって足をぬらしたというようなことがたびたびあった。釣ったり泳いだりしなくてもコンゴの山に沈む落日を眺めているのはそれだけで充分楽しい。必ずどこかに光り輝く雲があり、またどこかには夕立を降らしている暗雲があって、刻々にかわるその色彩をめづつ、われわれは毎日夕食にする。夕立はたいいてい一日の中のいつか、どこかでしている。それがこちらまでくることもあり途中で消えてしまうこともあった。ある日は朝からコンゴ側に夕立雲が起りそれがすごい竜巻を誘発して見るものを驚嘆せしめた。ここしばらくは天気続きで夕立はするけれど長降りはいらない。日がカッと照りつけているとさすがにちょっと暑さを感じずるが、それにしてもこれが南緯5度半かと疑うばかり。シュラフに入っている夜暑いと思ったこともない。いまごろの日本の気候を思えばまことに結構なところである。チェツェ蠅もここには殆んどいないし、河馬・ワニ・水牛といった連中も足あとだけでまだ誰も姿をみていない。

12月7日 Ufuru (独立)のために引揚げてこいという D.C. の勧告に従い、メス天一つに荷物をまとめ、盗伐(ここは forest reserve である)にきている木こり3人に留守番を頼んで一同 Kabogo を発つ。Ilagala

からは一台のランドクルーザーに10人詰めこみ、屋根に荷物を満載した。どの家も Ufuru を祝うため入口の前にヤシの葉でアーチがつくってある。8日の夜の12時を期し Ujiji で独立の祭典が行われるというので見に行く。

一番の見ものは英国の国旗が降され、それに代って Tanganyika の国旗がかゝげられるところだと聞いていたが、肝心の場面のまえで突然電灯が消え、しばらくして再び電灯がついた時には英国の国旗がすでに Tanganyika の国旗にかえられていた。英国の国旗のひきおろされることをみせたくなかったのであろう。そう考えたのはもちろん英国人に他ならないだろう。因みにこゝは国連の信任統治の筈なのに国連旗というものひとつも飾られていなかった。そして式場に立った D.C. の腰に短剣のぶらさがっていたこともわれわれには何か奇異な、むしろこっけいな感じを抱かせた。そのあとは30分ほど英国人の service による花火、Africa 人はこんなものをあんまり見ないらしく歓声をあげていたけれどわれわれからみれば子供だましのよーな打上げ花火だった。それで式は終わったがそのあと式場になっていた Ujiji 郊外の広場は、忽ちにして式典に参列した善男善女(?)によって占領され、フォークダンスが始った。そしてその中にまじって伊谷も踊り片寄も踊った。彼らはかくして夜明けまで踊りぬくのである。いな今晚だけでなく、これから2日まで毎夜夜通し踊るのである。そのつきあいはできないのでよいかげんにして Kigoma へ帰った。Kigoma というところは D.C. と少数のヨーロッパ人・多数のインド人からなる所でアフリカ人は至って少い。ここでも店先の飾りつけだけはしてあるがインド人の商店は軒並みに戸を閉めてひっそり閑としている。Ujiji なんていう気分は少しも感じられない。おまけにインド人の青年たちからなる一種の自警団が町を巡邏して歩いている。アフリカ人の住むところはどうだろうか、翌日の夕方車を走らせて Ujiji をもういちど尋ねたところ、役所のある通りは大変な人ばかり、顔を白くぬり、頭にアメリカインディアンがするような、鳥の羽をかざりつけ、背中に猿の毛皮を背負った異様な服装の女が単調なはやしにあわせて腰をくるくるまわし乍ら踊っている。なんだかはじめて Dark Continent という言葉と結びついて、われわれの頭の中にしまい込まれていたまぼろしのアフリカに、ここではじめてぶつかったような気がして、とても嬉しくなってしまった。滅びゆくものに対する哀愁といったようなものでなくて、心の底深く subconscious な領域にまで浸透して眠っていたなにかを呼びさます、その単調なたいこや同じくりかえしの合唱に、いつしかこちらもひきづり込まれたのであろう。単なる傍観者でなく、こちらもお祭り気分にく分かひたりえたのはよか

った。頭のすみずみまで常はめったに作用せぬホルモンによって洗浄されたようでもまことにさわやかな気持ちになって帰った。Ufuru の最後の日にはどこからきたのか、妖花のようなアフリカ美人が Kigoma の町に現われて、われわれの泊っている Lakeview hotel、東たちの泊っている Golden Lion hotel とバーをのみ歩きたれかれの差別なく愛嬌をふりまいたので皆その毒気にあてられて下痢するものが続出する始末、かく申す私もその一人で、これはいいわけがましいが Kabogo から Kigoma へ出てきて一週間もブラブラしていると飲みすぎ食いすぎの為に結局身体をこわすことになるのである。もはや一日も早く Kabogo へ帰らねばいけない。私は多分美人の毒気にやられたのでなくて、洋食にやられたのだ。もう紅茶もコーヒーものを通らぬ。早く Kabogo へ帰りクーへの刺身で日本めしをパクつけば下痢などいっぺんに治るに違いないのだ。

それでいよいよ今日から Kabogo への最後の輸送を開始した。まだ20トンの荷物がこの駅の倉庫にねむっていたのだ。まづ第1便として伊谷・片寄・富田・ブケニヤが2そうの船で Kigoma を発って、Kabogo へ向った。Kabogo までいままでの経験で2日はかゝる。一方で富川が Ilagala の輸送指揮官となって、明日トラック1台で Ilagala にむかう。その荷物を明后日 Kabogo から2そうの船がとりにくる。トラックは Kigoma — Ilagala 間をその後も3回往復して荷を運ぶ。船も同じ。今日からはじめたこの輸送にこんな訳で正味6日とられる。それもこの6日間波も静かであり、雨の為に陸上交通がと絶せぬという条件つきだから下手すれば10日近くかゝらぬともいえない。

最後になったが AACK もサルトロの許可がきた由、電報をうけとった。大万才である。緊禪一番そっちの方も凱歌のあがるところまでがんばり通してもらいたい。はるかなる Tanganyika 湖畔より AACK に祝いのことばを送る。

(今西記)

第四信 (12月29日 Kigoma にて)

第三信は Kigoma から Karago 基地への大輸送のはじまるところまでだった。いまはもうこの輸送も終ってみな専ら基地建設にかゝっているのだが、順序として輸送の報告からはじめる。

トラック2台チャーターする予定が1台しかできなかったことゝ、最初に Kigoma でチャーターした船の船頭が悪質で、途中で Kigoma へ帰るといゝだしたので輸送を中止するわけにいかず、彼等がでていったあ

と通りか、った Kigoma 行の船をよびとめ、この船をチャーターする約束をし、伊谷・ブゲはこの船に便乗して Karago までゆき、あとは陸路 Ilagala に出て、事情を Ilagala 駐在の富川に連絡した。Ilagala 到着は深夜であったという。ところで Ilagala には Kigoma へ帰るといって Kabogo から逃亡した悪質の船がきていた。併し富川は Kabogo からの通信も持たずにきた船に疑いを抱いたため積荷をさしひかえていたので、timely なそして勇敢な伊谷の連絡によりこゝで彼らは馬脚をあらわし、完全に放逐された。伊谷・ブゲは約束通りさきの船が Ilagala に寄港するのを待ってこれに積み込んだ荷物と共に19日朝 Kabogo に帰りこの船はまたひきかえし Ilagala へ荷をとりに行った。こんなわけで途中から2ハイの船が1パイになった為2日おくれたけれども始めの計画通り無事輸送を完了することができた。なお Ilagala で解約した悪質の船の1艘は Kigoma へ帰る途中エンジンが爆発して1名死んだというのがこの船についてはまたあとで書き足さねばならないことがある。

大輸送が終って全員基地に集結することはめでたいけれどそこでチャーターした船を帰してしまうと Kabogo 基地は全くの孤島にひとしいものとなって、その後は外界との連絡を完全に失うことになってしまう。それでわれわれはこれを救う為に基地用の小船を1艘買入れそれにエンジンをとりつけて Kabogo—Ilagala 間の定期便にするつもりであった。マンボを備ってあるのは将来この船の運チャンにするつもりである。この船はすでに Lugufu で建造中の新品を500シルで買う話がついており、エンジンの方は Dares に注文してあって東が最後に Kigoma をたつとき、Ilagala まで運んでくるという段取りであった。だから21日の最後の輸送船と一緒にわれわれの船もエンジンをつけマンボが運転して基地まで運んできておけば理想的なのだ。伊谷が20日にもういちど Ilagala まででかけているのは、この船を買いとって Ilagala へ廻送するためであった。併し船はまだでき上っておらず、エンジンも未着とあってこの問題はまだあとに残る。

基地建設に話を移すと基地では労働者として10人のアフリカ人を備っているが最初にこの10人の宿泊する小屋をたてた。屋根はトタン板が張ってある。船がつく毎に荷揚げをしなければならないがその一部はいまわれわれの住んでいる海岸のキャンプのメス天1、そのフライ1に収容し、一部は直ちに基地建設地まで運んだ。海岸から基地建設地まで約200m はすでに1m 巾の立派な道路がつくってあり、基地では基礎工事としての地ならしとセメント打ちが23日に終わった。その

夜は Bwana たちは大酒を呑みブドー酒1本、ブランデー3本がカラになる。翌日は労働者たちにも一日の休養を与えた。25日からは労働力の一部をさいて基地から上の道づくりがはじまる。われわれが Kabogo の奥の院と称しているところまで4-5 km の道づくりである。高度差は300m ぐらいだが Kabogo の山はなかなか奥ゆきがある。毎日チンパンジーの観察にでかける為にはこの道は絶対必要である。もちろん Miss Goodall はこんな手間はかけなかったろうが吾々のように基地建設という大がかりな計画をたてた以上は当然であろう。併し原始林の中に道をつくっていくのは楽しく自分の作った道を歩くことはなおさら楽しい。原始林といってもここは *Brachystegia* spp. の Woodland (open forest) でその梢の浅緑はブナをそぞろ思い出させる。もちろん谷間ぞい evergreen のジャングルが繁っているが道は尾根どおしにつけているから大部分は Woodland をゆくことになる。われわれは基地建設及び道づくりなどを1月15日までに終るようこれからも努力するであろう。

残った問題は船とエンジン。だが船はでき次第 Kabogo へまわすように伊谷が交渉しておいた。残りのエンジンは輸送に使った船がこのつき Kigoma へ出るとき持って帰ってくるようにしてあったのだが、26日早朝にこの船が戻ってきて Kigoma ではクリスマスでこの店も役所も閉めており用事が果たせなかったという。結局われわれのまあたらしい船は27日にその姿をわれわれの前にあらわした。

11月中は雨多く従って温度もたいしてあがらず隊員中には風邪をひく者さえあったが12月になって天気は次第によくなり毎日アフリカらしい暑さを感じずようになった。基地完成まで何とかこの天気が続いてくれることを祈る。

書き忘れていたが例の大輸送の時首にした船が裁判所へ約束不履行のカードで告訴していることがこんど Kigoma へ来てわかった。1000シルで荷物を運ぶことを約束し前金として400シル渡してあったのだが残り600シルをよこせというのである。被告は Itani and Toshi (彼はどこへいってもこれで通っている)。われわれは一步もひくわけにはいかぬ。

こんどは1月15日、16日頃 Kigoma へ出ることになるだろうからその時第5信を書くことにしよう。

(今西記)

資料6 多田道太郎氏の受難を報ずる新聞記事（1967年）

「自分の車をもっとしっかり守れるように、ヴァカンス中の日本人教授は柔道を習っておくべきだったのでは」

フランス刑務所の若い受刑者たちは、毎年夏、ランデダのペン＝エネーズでひとりの司祭が指導するキャンプに逗留する。

この聖職者は、自分の保護する若者たちに、拘留生活に輝きを与える「陽の光」を提供しようと無償で骨を折っている。拘留生活はたしかに、大自然に魅せられる彼らのような年頃の若者たちにとっては辛いものだ……。

ところが！ このキャンプの参加者たちは、毎年きまって世間を騒がせる。それも、「ヴァカンス」欄でそうなるのではなく——もしそうならわれわれも喜んで取り上げよう——、もっと暗くたちの悪い三面記事においてだ。

かくして、京都（日本）の人文科学研究所の若い助教授、多田道太郎氏は、悲しいかなそれを経験してしまった。

多田道太郎氏は、現在、当地を研究のために訪れており、木曜日の午後には自分で車を運転し、友人宅へ向かっていた。ペン＝エネーズ方面に走行中だった。東洋学を専攻する学生、ケルヴェルヌ氏が同乗していた。二人は、見るからに自動車を奪う気まんまんの暴漢に車を止められた。道太郎氏〔ママ〕とケルベルヌ氏は、もちろん、なんとか相手をなだめようとがんばったが、相手はますます凶暴になり（道太郎氏の首に残された跡がそのことを雄弁に物語っている……）、最後には通行人たちが間に入って、暴漢は取り押さえられた。

この暴漢は、フランス刑務所からキャンプに来ていた受刑者のひとりで、ラニリスの憲兵班によって直ちに逮捕された。名前はアラン・ラブティット、18歳だ。

この若者は昨日午後を送検された。ランデダの事件の他にも、いくつかの余罪を問われている。

（29日テレグラム紙）

「自動車を盗もうとしているところを見つかり、ランデダでキャンプ中のパリの男が自動車の持ち主の首を絞める
被害者は京都大学の教授
しかしなんとか男を拘束」

（ブレスト発）木曜日、京都大学人文科学研究所助教授・多田道太郎氏というひとりの日本人が、研究旅行でランデダを訪れていた。同氏には、パリの東洋語学院で学ぶランデダ出身のアラン・ケルヴェルヌ氏が

同行していた。16時30分頃、二人はペン＝エネーズに近いキスティリックの医学生・ケルルルー氏宅を訪問中だった。

二人が家のなかにいるとき、二人の乗ってきた「トヨタ」製の自動車が盗まれそうだと通行人が教えてくれた。

ひとりの若い男が車の窓ガラスを割り、ほんとうに車のなかへ侵入しようとしていた。多田氏は慌てて男を取り押さえようと駆け寄ったが、男は多田氏の喉をつかんでぐいぐいと締めつけ、多田氏は危うく窒息しかけた。他の人たち、すなわちケルルルー夫人、ケルヴェルヌ氏、そして通りかかったひとりの医師も、投げ倒されたり、平手打ちを食らったりした。だが、ラニリスの憲兵隊の到着を待ちながら、なんとか男を拘束することに成功した。

男の名はアラン・ラブティット、18歳で、パリから近隣のキャンプに逗留中だった。

ラブティットは昨日送検された。

多田道太郎氏のほうは、昨日、首に包帯を巻いて当地を立ち去った。

（29日 ウェスト・フランス紙）

訳注

スクラップされた新聞の切り抜きには、手書きで「29日」と記されているだけで、年月の記載がないが、このスクラップの前後に保存されている文書から、記事は1967年7月29日のものと推測される。このスクラップには、日本語の概略も添えられているが、メモ書き程度の文章なので、今回、訳者が新たに全文を訳し直した（ただし、一部の表現については上記の訳文を参考にした）。フランス刑務所は、パリ市の南に隣接するヴァル＝ド＝マルヌ県西部に位置するフランス最大の刑務所のひとつ（収容人員1500人）。ランデダ（Landéda）はブルターニュ地方の英仏海峡を臨む小自治体。ペン＝エネーズ（Pen-Enez）は同自治体の北部、英仏海峡に突き出るサント・マルグリット半島（自然保護地区）にあるキャンプ場。キスティリック（Quistillic）は同キャンプ場にほど近い海辺の地区（原文には Quistilloc とあるが、おそらく誤植だろう）。ラニリス（Lannilis）はランデダから東南東に5キロほど離れた小自治体。なお、二つの記事の内容には若干の齟齬が見られるが、桑原武夫編『素顔のヨーロッパ』（朝日新聞社）所収の多田氏の文章によると、ウェスト・フランス紙の記事のほうが事実を正確に伝えていると思われる。

（立木康介訳）

裏表紙（上から）

現在の人文科学研究所看板（新本館正面玄関）
旧本館の看板（新本館南入口に移設済）
東アジア人文情報学研究センター（2009～）看板
漢字情報研究センター（2000～2008）看板
東洋学文献センター（1965～1999）看板

京都大学人文科学研究所 創立80周年（所報 人文 特別号）

2009年10月30日 印刷

2009年11月5日 発行

編集・発行

京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
Phone 075-753-6902

編集協力
デザイン・DTP
印刷

共同印刷工業株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町156-1
Phone 075-312-1010

©京都大学人文科学研究所2009

*無断転載を禁じます

京都
大学
人文科学研究所

京都
大学
人文科学研究所

東アジア
人文科学
研究センター

漢字情報
研究センター

東洋学
文献センター